艦これ仕掛人

ピカリーノ1234

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

晴らせぬ恨みを晴らします。許せぬ人でなしを消します。

いずれも人知れず、仕掛けて仕損じなし。

人呼んで、『仕掛人』

ただしこの稼業、江戸職業づくしには載っていない…

料亭主人山本半右衛門、海軍提督輝（ひかり）梅安、阿賀野型軽巡矢矧。

時に現代平世の頃、悪は悪を生み、法とは名ばかりのものであった…

仕掛人は依頼により、無常の刃を振るう。

「俺は以前、実の妹を仕掛けにかけたんでな…」

「ワシはね、この世に生きていても仕方がねぇ、生かしておいても世のため人のためにならなぇ野郎でねぇと仕掛けませんぜ」

※ｐｉｘｉｖで連載している艦これ仕掛人の第１話「仕掛けて仕損

じなし」のスペシャル版を単発でこちらに掲載します。評判が良ければ他の話も掲載します。

目　次

仕掛けて仕損じなし ―― 1
夕陽の仕掛人 ―― 26
歳末大仕掛 ―― 47
ひとでなし消します ―― 71

仕掛けて仕損じなし

新年が明けたばかりの、この上ない寒い日の夜であった。
その車は、横浜の保土ヶ谷にある〔池田屋〕という料亭の玄関口で待っていて、宴席から抜け出してきた４０半ばの男を乗せると、街道へ走り出した。
車は、この近くに事務所をおく広域指定暴力団〔権田組〕のものだ。男は〔池田屋〕のなじみの客で、名を牟田口弁蔵（むたぐちべんぞう）といい、この権田組の若頭であった。
牟田口はこの日、事務所から車を仕立て、保土ヶ谷の池田屋へ向かい、車を待たせていたのだ。
運転手は牟田口の舎弟であったが、月も星もない暗夜の街道へ走り出して暫く経った頃に
「旦那、お寒くは御座いませんか？」
と、声をかけてきた。
その声を聞いたとき、牟田口は
（はて…）
妙な気がした。
自分の舎弟の声には、聞き覚えがある。だが、その声ではなかった。
暗い玄関口へ、池田屋の主人と座敷女中に見送られて出てきて、何気なく車へ乗りこんでしまった牟田口は、そのとき運転席で頭を下げて迎えた運転手の顔を、別に確かめてはいなかった。
ただ、顔にマスクをつけていた運転手を
（無礼な…）
と見たままである。それも
（寒いのだろう）
と思いなおし、むっつりと車に乗り込んだまでの事であった。
（声が違う…）
はっと、牟田口が辺りを見渡すと、車が事務所とは全く逆の方向へ走っている事に今やっと気づいた。
「あっ…」

大男の運転手である。牟田口の舎弟は、もっと躰が小さかった。牟田口が車へ戻った時、この舎弟はこれ程の巨漢であったか…

牟田口は少しも気づかなかった。

「何だてめぇは!?何処の組のモンだ!」

誰何して、牟田口は座席のシートベルトを外すと、躰を前にだして顔を運転手に向けた。

「海軍軍人の輝梅安（ひかりばいあん）という者でございますよ」

「ぐ、軍j…」

言いさして、牟田口の声が途絶えた。

牟田口の目から輝きが消え、口を開けたまま静止している。

舎弟…いや、仕掛人・輝梅安の左手が、牟田口の眉間から、ゆっくりと離れた。その左手に、殺し針がきらりと光った。牟田口の眉間の急所を深々と貫いた殺し針である。

梅安が殺し針を懐にしまうのと同時に、静止していた牟田口の躰が運転席と助手席の間に崩れ落ちた。

梅安は車を人気のない裏路地に停めると、周囲に人影がないのを確認すると、車から牟田口を引き摺り下ろして、何処かへと去っていった。保土ヶ谷の池田屋の玄関口にほど近い草むらで、若い舎弟の遺体が転がっていた…

＊

晴らせぬ恨みを晴らし
許せぬ人でなし消す
いずれも人知れず
仕掛けて仕損じなし
人呼んで〝仕掛人〟

ただしこの稼業
江戸職業尽くしには
載っていない…

≪必殺仕掛人オープニングより≫

＊

第１３鎮守府…
そこはどこにでもある普通の鎮守府である。最盛期には３００人以上の艦娘が所属する大所帯であったが、深海棲艦との停戦が成されて以降、軍縮の煽りを受け、現在では１２０人近くに落ち着いていた。
仕掛人・輝梅安はこの鎮守府の２代目にあたる司令官であり、提督としての執務と同時に、自身の軍医としての経歴を生かして、入渠施設において艦娘のケアもしていた。
その梅安が鎮守府の自室に帰り着いたのは消灯時間（２３００時）ギリギリであった。
（酒は明日にするか…）
梅安は直ぐ、押し入れから布団を取り出すと、８畳間の部屋に敷いてさあ寝ようとしたその時、自室の戸を叩く音が聞こえた。
「提督、梅安提督、まだ起きていらっしゃいますか!?」
声は、本日の秘書艦係の明石のものであった。
「なんだ?･また川内と江風が馬鹿騒ぎでなんかぶっ壊したのか?･」
梅安が戸を開けると、明石が転げ込んで入ってきた。
「じ、実は先刻遠征から第６駆逐隊の皆さんが帰ってきたんですが、その際負傷した深海棲艦を運んできまして…」

「種類は?それと容体は?」
「かなりの重症です。それに姫クラスで、外見から見て恐らく中間棲姫かと…」
「ふむ…」
「と、兎に角、早く医務室に来てください!」
明石の話を聞いた梅安は、重い腰を上げると、明石と共に医務室に向かった。

＊

明石と共に医務室に着いた梅安が見たのは、医務室のベッドで横になっている衰弱した中間棲姫と、それを看病する第6駆逐隊の面々であった。梅安が来たことに気付いた6駆の面々は、梅安に事のあらましを説明してくれた。
事はこうだ。6駆がボーキサイト輸送任務を終え帰りの航路についたその時、電が岩礁で倒れている中間棲姫を見つけたのだ。彼女は酷く衰弱しており、ただ
『タス…ケテ…』
と、途切れ途切れであるが、助けを求めていた。仕方なく、6駆は持っていたワイヤーを使って彼女を曳航して、鎮守府に帰還したのである。梅安が鎮守府に帰還する10分前の事であった。
「司令官さん…どうですか?」
電が恐る恐る梅安に聞くと、梅安は優しい声で答えた。
「お前さんらの応急処置のおかげで少しは和らいではいるが、まだ危険な状態だ。こりゃぁ徹夜になるかもしれんな」
梅安はそういうと、鞄から医療器具を取りだして、手当と治療をを開始した。
なるほど、重症であった。
あったが、しかし、梅安の奮闘と適切な処置でなんとか中間棲姫は

一命を取り留めた。
「これでなんとか大丈夫だろう。だがまだ油断は出来ん。何かあったら直ぐに呼んでくれ」
と、言い置き、梅安はひとまず自室へ戻った。空は既に夜が明けようとしていた。
梅安はグラスに注がれたスコッチ・ウィスキーを飲み干すと、寝床へもぐりこみ、たちまちねむりこんた。
深い眠りに落ちこみつつ、梅安は
（この一夜で、俺はこの手で一人を殺し、一人の命を助けた…）
そんなことをちらりと思ったが、それ以上の事はもう、覚えていなかった。己の所業の矛盾は、理屈では解決できぬものだ。世の中の矛盾も同様だ。これを無理に理屈で解決しようとしても、必ず矛盾が勝ってしまうのである。昨夜、梅安が仕掛けた牟田口弁蔵は、たしか、（世の中に生きていても仕方がない、生かしておいては世のため人のためにならん奴）
であるはずだ。

＊

「…い督、提督。火急の要件です」
この時、梅安はこの日の秘書艦係りであった香取の声で目覚めた。
「今何時だ？」
「現時点で１２３０時です」
「で、用件は？」
「実は…」
香取が言うには、前任の提督が鎮守府に来て梅安に会いたいという事であった。梅安はその前任の司令官に心当たりがあった。その男こそ、昨夜の牟田口弁蔵の仕掛けを梅安に依頼した元締めだったのである。

梅安は軍服に着替えると、鎮守府に正門に向かった。
「やぁ、山本閣下でしか」
「〝元〟閣下ですよ。梅安さん。私は既に退役した身ですから」
「ここでは立ち話もなんですから、私の執務室に行きましょう」
そういうと、梅安は客を鎮守府の中へ案内した。

この客の正体は、前任の第１３鎮守府司令官で名を、山本半右衛門（やまもとはんえもん）といい、外見は６０半ばの初老の紳士であるが、実年齢は遥かに若く、梅安とは１０しか離れていないのだ。そんな半右衛門だが、かつては「鬼」と恐れられる凄腕の仕掛人で、現在はこの辺一帯の仕掛人の元締めを務めていた。昨夜の牟田口の仕掛けを梅安に依頼したのも、この半右衛門である。

提督執務室で、半右衛門は仕掛料の後金である６００万を梅安に手渡すと、梅安はそれを懐にしまい込んだ。
「ときに、梅安さん。実は、貴方に会いに来たのは、別の要件がございまして…」
「元締、続けざまの仕掛はしない約束の筈ですよ」
「いえ、これは裏の稼業とは一切関係ない件です。実は昨夜、私の店に怪我をした深海棲艦が来ましてな。どうも誰かに追われていたようで、一応かくまったんです」
半右衛門の言葉に、梅安は昨夜の深海棲艦の事を思い出した。
「ほう…奇遇ですな。実は私の鎮守府にも、昨夜衰弱した中間棲姫の看病を徹夜でしたんですよ」
そう言いながら、梅安は２つのカップにコーヒーを淹れると、応対用の机に置いた。
「おや、それはまた奇遇ですな。実は私の所に来たのは、戦艦タ級でしてな。それはもう酷く衰弱しておりまして、出来れば、梅安さんに看てもらいたく…」

「あいや、みなまで言わなくて結構です。つまり、私に往診してほしいという事で？」
梅安はカップのコーヒーを飲むと、棚から医療器具や薬を入れた手持ちサイズの手提げ付きの箱を取り出した。
「早速、往診しましょう」
「おお、診てくれますか？しかし、提督業の方は…」
「その点はご心配なく」
そう言うと、梅安は館内電話の受話器を取り出した。
「おう、俺だ。すまないが矢矧を呼んできてくれないか」
1分と20秒後、矢矧が執務室に入ってきた。
「提督、お呼びですか？」
「おぅ、すまんが俺の留守を頼めんか。実は…」
梅安は事を矢矧に説明した。
「なるほど、それならお任せください」
「助かる。それじゃ元締め、行きましょうか」
「どうも」
梅安と半右衛門は立ち上がると、そのまま鎮守府を後にした。

＊

半右衛門が海軍を退役したのは、今から2年前の事である。海軍を退役した半右衛門は、鎮守府の近くにある自宅を改築して、小さな料亭〔音羽屋〕を開いた。この料亭は、第13鎮守府の面々にとっては憩いの場の一つであり、忘年会や新年会、更にはクリスマスパーティもここで行う事が今では定番となっている。
ここまでなら、普通の料亭であるが、もう一つの顔がある。それは、この音羽屋の中庭にある茶室の存在であった。
この茶室は、主に仕掛の取引が行われる際にしか使われない場所であり、普段は立ち入り禁止となっていた。

梅安と半右衛門がその音羽屋に到着したのは、既に夕刻であった。
「で、その患者はどこにいますんで？」
「中庭の茶室に匿っております」
「あの茶室に？」
「はい。本当でしたら病院に運ぶつもりでしたが、どうにも訳ありなようでして…」
梅安と半右衛門は中庭の茶室に入ると、半右衛門の妻であり元艦娘の三笠陽子と、意識を取り戻した戦艦タ級であった。
「あ、貴方、お帰りなさいませ。梅安さんもいらっしゃい」
「ああ、ただいま」
「どうも、お邪魔します」
タ級は梅安を見ると、少し警戒する素振りを見せた。それを見た三笠は、梅安は味方だと教えると、落ち着きを見せた。
梅安は、戦艦棲姫の躰に痛々しい痣と、数箇所に包帯を確認した。
「だいぶ酷くやられたな…一体誰がやったんだ？」
タ級は答えない。ただ、その眼から、酷い折檻を受けたことがわかった。
「私もそれを聞こうとしているんだが、これがどうにも…」
半右衛門も頭を抱えていた。とりあえず、梅安は手提げ箱から薬と医療器具を取り出した。
「後は私がやりますから、奥さんは手桶にお湯を入れてきてください。元締めは手拭いを」
梅安がそういうと、半右衛門と三笠は茶室から出ていった。
梅安の治療と診察は、そこまで時間はかからなかった。殆どの処置が音羽屋の手で行われたことが幸いしたのだろう。
「まぁ、大丈夫でしょう。暫くはここで養生して下さい。明後日また来ます」
梅安は一通りの処置を終えると、半右衛門にこう言い残すと、鎮守府に帰った。

＊

鎮守府に帰った梅安に待っていたのは、昏睡状態だった中間棲姫が意識を取り戻したという報告であった。梅安は直ぐに医務室に向かうと、そこには既に矢矧と今すぐにでも寝そうな６駆の面々が来ていた。

ベッドの中間棲姫は、程よく回復していたが、目は虚ろになっていた。

「ふむ、だいぶ容体は安定しているが、どうにもな…」

「なにが『どうにも』なんですか？」

「彼女は精神的に深い傷をおっている節がある。これを直さん限り、事情聴取もマトモにできねぇって訳だ」

梅安は頭を抱えながらそう言った。梅安の専門はあくまで外的損傷や病気であり、精神療法は専門外であった。

「心の傷ってもんは、こいつぁ俺でもどうしようもないからな…ま、気長に待つしかないな」

そんな…と、６駆の皆が口を揃えて言った。その時、梅安は雷が右手にハート型の南京錠を持っている事に気付いた。

「おい、雷、そりゃあなんだ？」

梅安は南京錠に指を指すと、雷は手に持っていた南京錠を梅安に渡した。

「え？これのこと？これは私がこの人のアキレス腱にかかってたのを見つけて、明石さんに頼んで開錠したの」

梅安は雷の説明を聞きながら、その南京錠を観察した。すると、南京錠の背面に、漢数字で小さく『五十三』と彫りこまれている部分を見つけた。

（『五十三』…『五十三』…もしや、第５３鎮守府の事か…！）

梅安は、一昨年の聖夜の出来事を思い出した。

一昨年の師走、当時海軍陸戦隊の帝都守備隊に所属していた梅安は、札屋を営む仕掛人の元締め『東間吉兵衛』からある仕掛けを５０万で引き受けた。仕掛の的は第５３鎮守府の司令官『五味銑十郎』といい、海軍内でも暴力沙汰で何度か営倉入りをくらっていた問題人物であった。この男は典型的な差別主義者であり、艦娘を物以下のように扱い、ひいては自分の性欲のはけ口に使うなど、まさに〝生きていても仕方がない奴〟であった。師走のクリスマスイブの夜、○×橋でホームレスに変装した梅安は、通りかかった五味を

（事故死に見せかけて）

仕掛けたのである。数日後、五味は憲兵隊によって『事故死』として処理されると、第５３鎮守府は海軍特別警察隊第５３方面隊の押し入り調査の後、解隊されたのである。

自分が仕掛けた相手が生きている…嫌、あの時確かに手ごたえはあった。となれば、何者かがその〔第５３鎮守府〕の名を騙り、アコギな事をやっている事を思うと、怒りが込み上げてきた。

「矢矧、すまんが日進を呼んできてくれないか？大至急だ」

「えっ？は、はい。了解しました・直ちに」

梅安は矢矧に耳打ちすると、矢矧は直ちに医務室を退室した。

「さぁおめぇら、後は軍医さんのお仕事だ。お前さんらは昨日っから徹夜続きだったから、早く寝たほうがいいぞ」

梅安が手を叩いてそういうと、６駆の面々を部屋に送った。

梅安は、自分がとんでもない事件に巻き込まれたという事を、肌に感じていた…

＊

一刻後、梅安の執務室に一人の女性が入ってきた。

この女性、名を〔おひろめの日進〕といい、表の稼業は駄菓子屋だが、裏では山本半右衛門お抱えの密偵をしている。かつては梅安が贔屓していた情報屋の一人で、今でもその中は続いている。
日進が入ってきたとき、梅安は執務室の火鉢で軍鶏鍋を造っていた。
「珍しいですね。梅安さんからあっしに頼み事ってのは。なにか調べ事っすか？」
「まあそんなところだ。まぁかけてくれ」
日進は梅安に向かい合うように座った。
「それで、調べたい事はなんすか？」
「ああ、実はだな。一昨年の暮れに俺が仕掛けた五味銑十郎の件で少し気になることがあってな」
「へぇ」
「実は昨日の夜、俺が治療した中間棲姫に、こんなものが付いてたんだよ」
梅安はハート型の南京錠を日進に見せた。
「それって確か、解隊された第５３鎮守府の……」
「ああ、その通りだ。で、本題なんだが、一昨年の銑十郎殺しを札屋の元締に頼んだ〔起こり〕を調べてほしい」
「銑十郎殺しの〔起こり〕っすか!?梅安さん、そりゃあ不味いっすよ。下手したらそれは〔掟〕に背くことでっせ！」

仕掛人は、殺した男が何処の何者か、何故殺さねばならなかったのか、それには一切関知してはならない。
ただ、仕事の仲立をした〔蔓〕の
「世のため人のため、生かしておいてはいかん奴」
という一言を信じて、この〔仕事〕に精魂を傾ける……それが、仕掛人の掟である。
輝梅安とて、それは例外ではない。
そして仕掛人は、あくまで仲立をした〔蔓〕の依頼で殺しを行うの

であり、本来の依頼人である〔起こり〕の事を知ってはならないのだ。

「掟を背くことは百も承知だ。だが、札屋の元締が〔起こり〕に騙された可能性も否定できん。だからこそ、調べてほしい」

梅安のその言葉に、日進は軽く舌打ちをし

「しようがないねぇ。他ならねぇ梅安先生の頼みだ。引き受けますよ。そのかわり！銭は高くつきまっせ！」

「わかったよ。さ、一杯やろか」

軍鶏鍋は、既に出来上がっていた。

＊

梅安が日進に頼みごとをして数日たったある日の早朝、梅安と矢矧は音羽屋を訪れていた。診察したタ級の往診と、もう一つ別の案件があった。それは、中間棲姫のアキレス腱から雷が見つけた『五十三』の刻印が彫りこまれた南京錠の事で、半右衛門から話があるとの事であった。

梅安は二階の個室に招かれると、そこには半右衛門と、もう一人、梅安がよく知る男が茶を飲みながら待っていた

「やぁ、梅安さん。急に呼び出してしまって申し訳ない」

「いえ、しかしこりゃ驚いた。あの〔阿修羅の源蔵〕がここにくるとはね」

「ふ、まあな」

〔阿修羅の源蔵〕…本名を『長谷川源蔵（はせがわげんぞう）』といい、江戸寛政の頃に火付盗賊改役であった長谷川平蔵宣以の子孫にあたり、現第７鎮守府の司令官であるこの男のもう一つの顔こそ、海軍軍令部が本土近海におけ

る海賊行為や密漁、テロ行為及びブラ鎮取り締まりのために創設された警察組織〔海軍警務隊〕の長官であった。彼は仕掛人の存在をいち早く感づいており、仕掛けの後処理などを進んで行うなど、協力的な人物である。

「で、元締、ご用件は？」
「うむ、実は…」
　梅安が聞くと、半右衛門は袖の下から、梅安が持っているのと同じ形状の南京錠を取り出した。
「これは…」
　梅安はもしやと思い、懐からあの南京錠を取り出した。
「おや、梅安さんもそれを」
「ええ、実は数日前から、日進を呼び出してちと調べ事を…」
「ほほう…それはまた奇遇な…」
　偶然、というには、いささか奇妙なものであった。源蔵は二つの南京錠を手に取ると、すぐに携帯用ルーペを取り出して調べた。
「どうですか源蔵さん」
「…間違いなくこの二つは全く同じものだ」
　源蔵の言葉に、梅安と半右衛門は目を合わせるのと同時に、一つ目のパズルのピースが見つかった事を感じた。
「これでやっと一つ目の謎が解けましたな」
「ええ、やっとです」
　この時４人は、梅安の鎮守府に来た中間棲姫と音羽屋が匿った戦艦タ級が、同じ場所から逃げてきたこと、そして途中で離ればなれになってしまった事がわかった。
　しかし、まだ謎は多い。どうして２人は〝第５３鎮守府〟から逃げてきたのか、どのような目にあったのか？まだまだパズルの完成は遠いものであった。
　４人は行動に移った。
「源蔵さん。すみませんが、第５３鎮守府について、少しあらってもら

いませんか？」
「わかりました。遠征任務を利用して、第５３鎮守府跡地に探りを入れます」
「あっしは中間棲姫から何か聞き出せないかやってみます。」
「頼みます」
４人は立ち上がると、それぞれの行動に移った…

＊

第７鎮守府……
第１３鎮守府と同じ第２地方に置かれたこの地方鎮守府は、海軍警務隊の本部としての機能を有しており、その陸上設備は第２２ＳＡＳ連隊の総本山であウェールズＲＡＦ基地グレデンヒルに匹敵する規模を持つ。
所属隊員は艦娘以外にも深海棲艦、陸戦隊員など、その総数は横須賀鎮守府に引けを取らない。
音羽屋での会合から一夜明けた朝、長谷川源蔵は密偵、出浦伊三次と小房のワ級を呼び寄せた。

この出浦伊三次という男、かつては情報屋であったが、源蔵にスカウトされ海軍警務隊の密偵となった男である。
もう一人、小房のワ級はかつて長谷川源蔵によってお縄にかかった兇賊〔野鎚のヲ級〕の手下であったが、長谷川源蔵の人柄に惚れ、自ら密偵となった深海棲艦である。

「おう、来たな」
『長谷川様、今回ハ何ノ用デ？』

「おう、実はだな。一昨年の暮れに海軍特別警察隊第５３方面隊が第５３鎮守府にガサ入れしたのは覚えているか？」
「はい、ニュースで見ています」
「実はな……」
源蔵は二人に昨日の会合の事を説明した。
『成程……ソウイヤ二年前グライニ、中国マフィアト特警隊ノ幹部ガ裏デ癒着シテルッテイウ噂ヲ耳ニシタ事ガアリマス』
「あっしも、情報屋仲間から五味と地元特警隊員が裏で人身売買をやってるていうのを聞いた事があります」
「ふむ……となればこのヤマと一昨年の銃十郎殺し、繋がってると見ていいかもしれん。よし、お前達は第５３方面隊の裏を洗ってくれ。場合によっては我らの出番もあるやもしれんからな」
『ハハッ！』
「承知いたしました！」
密偵達はそのまま執務室を立ち去った。
源蔵は懐から煙草を取り出し、吸い始めた。

＊

それから数日が経過し、やっと中間棲姫がマトモにコミュニケーションが取れるくらいに回復すると、梅安は中間棲姫を執務室に連れてくるよう矢矧に指示した。
正午近く、梅安は執務室に特別に造らせた厨房で、昼飯のたまご雑炊を作っていた。
雑炊が２杯出来上がるのと同時に、矢矧が中間棲姫を連れて執務室にやってきた。
「おう、お前はもういいぞ、それと今日は遠征無しだ。皆英気を養ってくれ」
梅安のその言葉で、矢矧は中間棲姫を残して退室した。二人きりと

なった執務室で、梅安は応接用のソファに彼女を座らせると、たまご雑炊を置いた。
「腹減っただろう。食ってくれ。俺の特製だ」
中間棲姫は雑炊を見ると、傍にあったスプーンを持つと、勢いよく食べ始めた。よほど腹が減っていたのだろう。
「こらこら、そうガッツくな。おかわりはたんまりあるぞ」
そう言いながら、梅安も雑炊を食べ始めた。我ながら美味い。言葉にできねぇ味だ！梅安は自身が作った雑炊を心の中で自画自賛した。
そう時間が経たない内に、二人はおかわりも含めて完食した。
『貴様…優シイナ…』
中間棲姫は言った。
「あったりめぇよ。俺は軍人だが、それ以前に医者でもあるんだ。『医者たる者患者には優しく接しろ』ってね」
梅安は笑顔で答えた。
その答えを聞いた中間棲姫は、少し微笑んだ。
それを見た梅安も、微笑んだ。
「さて…実は君に、少し聞きたい事がありましてね」
『ドンナ事ヲダ…』
梅安の言葉に、中間棲姫は首を傾げた。
「嫌なに、『医者たる者、病のよって来たる根源を知り、それに応じて治療の法をこうずる者』なんてね。君はどうしてあの岩礁にいたのか、どうしてあのような躰になったのか。私は知りたいんでね」
中間棲姫は、顔を下げて黙っている。
「無理に話さなくてもいい。誰も、嫌な思い出は思い出したくないものだ」
梅安は労いの言葉をかけた。すると、中間棲姫は小声で梅安に語りかけた。
『貴様ハ…私ノ…味方カ…？』
「大丈夫、味方だ。信じてくれ」
梅安はサムズアップで答えた。中間棲姫はそれを見ると、恐る恐る語り始めた…

＊

≪推奨ＢＧＭ：仕掛人無常≫

私ハ…今カラオヨソ二４日前、奴ラニ連行サレタ…

誰に？

海軍特別警察隊…第５３地区方面隊…

特警隊がなんで深海棲艦を？

ワカラナイ…ダケド、奴ラハ私ヲ捕マエルト、廃棄サレタ鎮守府ニ連レテ行カレタ…

第５３鎮守府…

ワカラナイ…私ハソコデ、足首ニ南京錠ヲツナガレ、一晩中奴ラニ犯サレタ…休ム暇モナク犯サレ、叩カレタ…

お前さんの体中の痣はそれが原因だったのか…

ソノ後、私ハ地下ノ牢ニ監禁サレタ…ソコニハ、他ノ深海棲艦ヤ、艦娘モイタ…

奴らはなんでそんな惨い事を…？

ワカラナイ…タダ、奴ラハ私達ヲ「家畜」トシカ言ッテイナカッタ…

どうして逃げてこれたんだ…

アル時、噂ヲ聞イタ…

噂？

コノ国ニハ、〔仕掛人〕ト呼バレル人達ガ、恨ミ辛ミヲオ金デ晴ラシテクレルッテ…私ハ、タ級ト２人ノ艦娘ト一緒ニ、皆カラ手持チノオ金ヲ持テルダケ持ッテ、隙ヲ見テ見張リ番カラ牢屋ノ鍵ヲ盗ンデ、脱走シタ…ケド

けど？

私達ガ海上ニ出テスグ、奴ラノ監視網ニ引ッ掛カッテシマッタ…ソノ時、２人ノ艦娘ガ私達ノタメニ…

…そうか
追手カラ逃レルベク、私トタ級ハ二手ニ別レタ…ソノ後、私ハ追手ヲ何トカ撒イタガ、モウ走ル力モ無ナクナッテシマイ…
あの岩礁に座っていたのか…
……アア、後ハ知ッテノ通リダ。

＊

梅安は中間棲姫の話を聴き終えると、湯呑みに淹れていた茶を啜ると、執務室のカーテンを閉めて、低い声で言った。
「…幾らだ」
『エッ…？』
「…今どれくらい持ってるかと聞いている」
中間棲姫は懐から金を出した。萎れてはいるものの、確かに金であった。梅安はそれを見ると、それを懐に入れた。
「これは俺が必ず仕掛人に届ける。安心しな」
『本当ニ…』
「ああ、約束する」
梅安はそう言うと、中間棲姫を医務室まで送ると、矢矧を呼び、

＊

梅安が、中間棲姫から経緯を聞いている頃とほぼ同じ頃、半右衛門は、茶室でタ級から経緯と、仕掛けの依頼を聞いていた。
「よもや特警隊がそのようなアコギな事をやっていたとは…」
『ハイ…』
タ級は、懐から金を取り出すと、改めて半右衛門に依頼した。

『オ願イシマス！コレハアノ牢獄ニ閉ジ込メラレタ皆ノ恨ミノ全テデス！ドウカコレデ、アイツ等ヲ…！』
タ級の怒りがこもった声を躰で受け止めた半右衛門は、畳に置かれた金を懐にしまうと、こう言った。

「その恨み、確かに聞きましたぞ」

＊

夜中の酉の刻（２１００時）、音羽屋の地下にある物置に、半右衛門、梅安、矢矧の３人が集まっていた。
そこに、日進とその姉にして同じく半右衛門配下の密偵である〔油紙の春日〕が入ってきた。
「で、日進。どうだった」
「梅安さんの読み通りです。どうやら銑十郎殺しを札屋の元締に依頼した〔起こり〕は、第５３方面隊の隊長に間違いありません」
「やっぱりそうだったか。情報料は次の仕掛の時に払ってやるよ」
「まぁ、それに関してはそれで手を打つとして、これには続きもあるんですよ」
日進は懐からある資料を取り出した。
「これはなんです？」
「これは一昨年の第５３方面隊が第５３鎮守府に立ち入り調査をした時の写真だよ」
梅安と矢矧は、写真を一枚一枚捲りながら見ていたが、殆どの写真が見たことのないものであった。
「おい、こいつぁ…」
「察しの通りです梅安さん。これは全て第５３方面隊の保管庫の中に

管理されていた未公開の写真です」
　写真には、大型の地下牢獄と、拷問機器、更には媚薬の製造工廠であった。更に春日は、一つの書類を出した。
「こいつは？」
「源蔵さんが私達にと…」

　その書類には、驚くべき事が書かれていた。銑十郎と第５３方面隊隊長〔近江弥之助〕は、裏で中国マフィアと繋がっており、手当たり次第に手篭めにした艦娘達を人身売買にかけていたのだ。その時の取り分で銑十郎と対立した弥之助は、遂に吉兵衛に銑十郎の仕掛けを依頼したのである。銑十郎が殺されると、弥之助は銑十郎を事故死として扱い、更に第５３鎮守府に〝形だけの〟立ち入り調査を行い、第５３鎮守府を表面上〝解隊〟させたのである。その結果、弥之助は銑十郎の利益と施設すべてをそのまま手に入れ、今度は深海棲艦にも手を出し始めたのである。

　報告書を読み終わった梅安と矢矧の心には、静かな怒りの炎が燃え上がっていた…
「〔起こり〕は、深海棲艦の中間棲姫と、戦艦タ級。それと、札屋の吉兵衛。的は海軍特別警察隊第５３方面隊司令官〔近江弥之助〕大佐、同隊副官〔的場平次〕少佐。仕掛料は、前金として一人頭２００万、後金２００万の合計８００万、御二方、引き受けてくれますな」
≪推奨ＢＧＭ：出陣＜Ｍ３５＞（必殺仕掛人より）≫
　半右衛門の言葉を聞いた二人は、綺麗に配分された仕掛料を、それぞれ懐に入れると、その場を去った。
　一人となった半右衛門は、薄暗い物置を照らす蝋燭の炎に息をかけると、暗闇が半右衛門を包んだ。

仕掛けは、今夜―

＊

その頃、５３方面隊隊舎の執務室では、脱走した中間棲姫と戦艦タ級の捜索結果が報告されていた。
「で、まだあの２人は見つからねぇのか!?」
近江は苛立ちながら的場の報告を聞いていた。
「隊を総動員して捜索しておりますが、これ以上やると警務隊に露見する恐れが…」
「言い訳は聞きたかぁねぇ！その前に奴らを見つけて消すのが貴様の仕事だ！わかったらさっさと行けい！」
近江はそう言うと、的場は執務室から退室した。
（折角仕掛人利用して手に入れた利益だ、それをあの時代遅れの警務隊に潰されてたまるかってんだ！）
近江は執務机の棚からブランデーボトルを取り出すと、そのまま飲み始めようとした、その時だった。
≪推奨ＢＧＭ：仕掛人梅安≫
「!?な、なんだ?」
突如、隊舎の証明全てが消灯した。まだ消灯時間には１時間半早い…近江は不安に駆られた。近江は館内電話の受話器を取るが、繋がらない…
「お、おい…どうなってるんだよ…」
近江は恐怖した…直ぐに机の引き出しにあった９４式拳銃を取り出した。しかし、既に時遅しだった。
ドシュッ！
「!!」
近江は声にならない悲鳴を上げた。そして、その背後には、黒衣に

似た服装をした梅安が、近江の盆の窪の急所に深々と殺し針を刺していた。
「己の欲の為に仕掛人使ったツケだ…釣りはいらねぇぜ」
梅安が殺し針を抜いた直後、息が絶えた近江はそのまま崩れ落ちた。梅安は殺し針を懐にしまうと、そのまま暗闇に消えた。

＊

「おい…一体どうなっているんだ…」
的場は部下2名と共に外にある電源施設に走っていた。隊舎には今殆どの人員を鎮守府の警備と脱走した2名の深海棲艦の捜索に割いていたため、今この隊舎には的場と近江の2人を含めた4人しかいなかった。この状況で警務隊に突入されたら一溜りもない…それは的場と、他の2人もわかっていた。だからこそ、電源が落ちた原因を究明することは、急務であった。
的場達が電源施設へ近づいた、その時だった。
♪～
突如、後ろから笹笛の音色が聞こえた。3人は音色を背中から聞くと、後ろを振り返った。
そこには、黒装束に身を包み、腰に長ドスを帯刀した矢矧が立っていた。
「誰だ貴様は！」
的場が問うと、矢矧は笹を捨てて、名を名乗った。
「仕掛人、軽巡矢矧」
≪推奨ＢＧＭ：仕掛けて仕損じなし≫
「…仕掛人？」
的場達は首を傾げると、矢矧は腰の長ドスの柄に手をかけた。
「御命を頂戴します。刀を抜きなさい…抜きなさい！」
矢矧は的場達に近づきながらそう言った。的場達は矢矧の闘気に

後ずさりするが、すぐに気を取り直した。
「やせ艦娘風情が調子に乗りやがって…構うこたぁねぇ、ぶっ殺せ！」
的場はそう言うと、部下２名が軍刀を抜いて矢矧に突っ込んできた。
部下が刀を振り下ろそうとしたその一瞬、矢矧は持ち前の抜刀術で返り討ちにした。
「なっ…!?」
的場は恐怖に駆られた…殺される。矢矧の目から出る闘気は、的場の防衛本能を暴走させるに、十分な起爆剤だった。
「う…うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
的場は軍刀を抜き、出鱈目にぶん回しながら矢矧に突っ込んだ。しかし、それが的場の寿命を縮めた。
ズバッ！
「ぐぇっ！」
矢矧は一瞬の内に的場の躰を横に斬り裂くと、トドメとばかりに的場の心臓を貫いた。
ドスッ！
「ガハッ！」
的場は吐血すると、すぐに息絶えた。矢矧は的場の躰に刺したドスを抜くと、刃にこびり付いた血を払い落とすと、ドスを鞘に収め、暗闇に消えた。

＊

それから約１時間後、源蔵率いる海軍警務隊第１夜戦特化隊が第５３鎮守府跡地並びに第５３方面隊隊舎に突入、およそ２００人近い艦娘と深海棲艦を救出、司令官及び副官他２名を除く第５３方面隊所属

隊員を停戦条約及び軍規違反で拘束。数日後、第５３方面隊が秘匿していたものの数々の所業が警務隊による調査で判明。軍令部は、第５３方面隊の解隊及び再編成を決定した。
　また、死亡した近江弥之助少将は、死亡する数分前にアルコール飲料を摂取していた事が判明し、源蔵の手により『急性アルコール中毒による病死』として片づけられ、的場以下３名は『抵抗の末止む無く殺害した』として処理された…

＊

≪推奨ＢＧＭ：必殺仕掛人エンディングテーマ（Ｍ２１）≫
「ねぇ提督」
「ん？どうした陸奥？」
　入渠施設に設けられた鍼療治施設で、梅安の鍼を受けていた陸奥が、妖艶な口調で梅安に問いかけた。
「提督って、世間では大層な女〝ごろし〟なんですってねぇ～」
「ほほう…誰がそんな酷い噂を、青葉ですかな」
　梅安は答えると、陸奥の右肩に軽く刺した治療用の鍼を抜くと、消毒液を入れたボールに入れた。
「みぃ～んな知っているわよ」
　陸奥は妖艶な口調のまま、そう答えた。梅安はそれを聞くと、手を洗い、顔を陸奥の耳に近づけた。
「お答えしましょうか…でもね、女なら誰でもってわけじゃぁ、ないんですよ」
　梅安の耳打ちを聞いた陸奥は、下着だけ身に付けた上半身を梅安に向けた。
「提督ぅ。私みたいな女人（ひと）じゃぁ、駄目なのかしら？」

「へっ？」
梅安はとぼけたが、陸奥はそんな梅安に抱き着いた。
「えっ、ちょっ不味いぞ陸奥こんな真昼間から夜戦（意味深）なんて…」
「今日は皆遠征と演習で出払ってるから、大丈夫大丈夫♡」
そのまま梅安と陸奥は、ベッドに横に倒れた。

その日の夕方、遠征と演習から帰ってきた皆が見たのは、妙に顔にハリがついた陸奥と、酷く寝不足な梅安であったという…

艦これ仕掛人スペシャル「仕掛けて仕損じなし」

夕陽の仕掛人

その日、輝（ひかり）梅安は、第１３鎮守府の東へ半里（約２㎞）海沿いへ行った所にある料亭〔出雲丸〕に向かっていた。梅安にとってそこは馴染みの料亭で、そこの女将である元艦娘の飛鷹とは、情事を共にする関係であった。

梅安と飛鷹が、何故このような関係に至った経緯は、時を５年ほど遡る。

五年前の初夏、南方海域のサブ島戦線から本土に召還された梅安は、歌舞伎町で百貨店を営む裏稼業の元締〔大黒屋市兵衛〕からある仕掛けを２００万で頼まれた。当時の梅安は、サブ島で多くの兵士の生き死にを目の当たりにしていた事から精神的にまいっていたため、到底仕掛けをする気にはなれず断ってしまった。

その２日後、梅安は川で身投げしようとした１人の艦娘を助けた。それが飛鷹である。

梅安は飛鷹に、なぜ自殺しようとしたのか、その経緯を尋ねた。

それはあまりに酷い話であった。飛鷹は元々第８９鎮守府に所属していたが、２週間前のサーモン海域での任務の道中で弾薬が底をついたため、撤退を進言したが、司令官の〔今井千蔵〕はそれを却下、進軍を命令した。飛鷹はその命令を破り、独断で撤退を決断し、鎮守府に帰還した。

だが、帰ってきた飛鷹達を待っていたのは、〔憲兵〕を騙った今井の雇ったヤクザ共による凌辱であった。飛鷹達は死に物狂いで抵抗し、なんとか鎮守府を逃げ出したが、その代償として純潔を失ったのである。路頭に迷った飛鷹達は、帝都の歌舞伎町で仕掛人の噂を聞き、頼み金を稼ぐべく皆が泡風呂に身を沈めた。その中で、１人、また１人が首をくくり、とうとう飛鷹だけが残されたのである。

梅安は事の経緯を聞くと、飛鷹が持っていた５０万の金のうちの１０万を貰うと、遂に今井の仕掛けを決心した。その数日後、梅安は今

井を
（卒中に見せかせて）
仕掛けたのである。その翌日、今井の死は地元憲兵により〔病死〕として片付けられた。しかし、本題はここからであった。
数日後、市兵衛の自宅に呼ばれた梅安は、驚くべき事を聞かされた。実は、今井の仕掛けを市兵衛に頼んだ〔起こり〕は、飛鷹その人だったのである。結果的に梅安は、図らずも市兵衛の依頼を間接的に引き受けてしまったのである。市兵衛は前金と後金を含めた仕掛料を梅安に渡すと、
『いやはや、最初は断っておきながら、〔蔓〕である私に黙って〔起こり〕に直接会って引き受けてくれるとは、梅安先生もお人が悪いですなぁ。はっはっはっ』
と、笑いながら言った。その時、梅安は貰いたくもない仕掛料を懐に入れた。
その後、梅安は飛鷹が居たソープを見つけると、その仕掛け料で飛鷹の身請けをして、1夜限りの関係を持つと、当時海軍軍人であった半右衛門に預けたのである。
その4年後、梅安は第13鎮守府に着任して1週間が経ったある日、偶然にも料亭の女将となっていた飛鷹と再会した。そして、梅安はまた飛鷹を抱いた。それ以降の梅安は
（もう吉原に行く気も失せた…）
と思うほど、飛鷹以外の女には手を出さなくなり、そして、今に至るのである。

梅安にとって、4ヶ月振りとなる出雲丸での晩酌であった。
（今夜は飛鷹と朝までいるか…）
そんな事を考えながら、梅安は鎮守府で借りたＬＥＤランタンを右手に持ち、夜道を歩いていた。
行手は真っ暗闇だった。
鎮守府の門を出て、どのくらい経ったのだろうか。

突然…
梅安は、背後から誰かが近づいているのを感じた。梅安が立ち止まると、その者も立ち止まった。梅安が再び歩き始めると、その者もまた、歩き始めた。
梅安は再び立ち止まると、今度は背後から殺気を感じとった。梅安はＬＥＤランタンの電源を消すと、ぱっと3間ほど飛び退った。
「誰だ？」
梅安は重く低い声で、今しがたまで自分が歩いていた彼方の闇に問いかけた。
闇は答えない。ただ、その闇の中に、キラリと光るものが見えた。
銃身が光ったのだ。
再び梅安は飛び退ると、
「この私を、帝國海軍第１３鎮守府司令官・輝梅安と知っての闇討ちか？」
闇に切りつけるように言った。
すると、梅安は相手の殺気がゆるんだのを感じた。
よくは見えないが、覆面の艦娘…しかも戦艦娘らしい。
そのまま、梅安も相手も動かなかった。
ややあって、相手が銃をしまう音が聞こえた。
「第１３鎮守府（うち）の艦娘じゃないな…どこの所属だ？」
梅安は訊ねたが、相手は答えない。ただ、
「ｔｒａｕｒｉｇ（すまない）…」
といって、闇の中に消えた。
梅安はしばらく身を沈めていたが、すぐに身を起こすと、静かに、そしてゆっくりと鎮守府に戻った。
鎮守府に戻った梅安は、まず執務室の電話を使い、飛鷹に急用で来れない事を告げた。
「本っ当にごめん！突然急用が入っちゃったんだ！この埋め合わせはちゃんとするから！な！だから機嫌直して！…うん、うん、それじゃ、また暇な日に」
電話を切った梅安に、それを隣で聞いていた矢矧が皮肉めいた口調

で問いた。
「また、飛鷹さんのご機嫌とりですか？」
その言葉に、梅安は舌打ちして外を向いた。このごろの鎮守府では、梅安と飛鷹の関係は、もはや
「誰も知らぬものはいない」
ほどであった。
だがそれよりも、梅安と矢矧は先刻梅安を襲った謎の艦娘のほうが気がかりだった。
「しかし、あの提督が近づかないほど気がつかないとは…」
「ああ、恐らく結構腕が立つガンマンだな」
梅安は、襲われた時こそ相手の見た目は分からなかったが、その手に持っていた銃は把握していた。
「S＆W　M3スコフィールド・リボルバー。かってあのSAAと米陸軍正式拳銃の座を争った傑作中折れ式リボルバー。しかもそのステンレスモデルだ」
「しかしステンレスモデルはS＆W社では製造していないはずでは…」
「恐らく特注品、いやカスタムモデルだろう」
「カスタムモデル…ですか？」
「ああ…それも腕利きの職人によるな」
「では、相手はやはり仕掛人…」
「いや違うな」
梅安は矢矧の考えを否定すると、湯呑みに淹れていた茶を啜った。
「何故そうだと？」
「本来腕が立つ仕掛人なら、仕掛ける的の顔を事前に見て、そっから段取りを考える。そして相手に殺気を感じさせることなくあの世に送る。ところが奴は、俺を的かどうかも確かめずに殺気を剥き出しにして襲いかかった。ようは殺しに関してはドがつくトーシローだ。尤も、それを言っちまうとお前もまだまだ青いって事だ」
梅安の説明を聞いた矢矧は、自分もまだまだ甘いという事を実感した。

「さて、と。俺は自室で寝てくるか。お休み」
梅安はそういいおくと、執務室から退室した。そして、矢矧もまた、執務室の灯りを消して、退室した。

＊

その日の深夜、ある事件が起きた。1年前、海軍警務隊に逮捕された反体制派の最大勢力である〔新日本赤軍〕の最高幹部〔江戸島権蔵〕が収監されている小田原の政治犯収容所をテロリストが襲撃、激しい銃撃戦の末、収容所の所員全員が射殺され、テロリストは収監されていた権蔵を連れ出したのである。

＊

翌日の朝、地元警察から報告を受けた源蔵は、副官の佐嶋弥三郎中佐と秘書艦の武蔵及び第1夜戦特化隊の隊長である軽巡棲姫と共に現場である収容所に来ていた。
「奴ら、結構派手にやりやがったな」
源蔵は現場の内情を見て、そう言った。壁には流血の跡が飛び散り、床には爆破された外壁の破片が飛び散り、至る所に弾痕が確認できた。
4人は奥に進むと、ブルーシートで覆われた仮の遺体安置所に到着した。4人は中に入ると、夥しい数の遺体が列を成してブルーシートを被せられている様子が目にうつった。源蔵は遺体の一つに近づき、手を合わせて短く念仏を唱えると、被せていたブルーシートを剥がした。
そこには、とてもかつてこの場で生きていた人間とは思えない程、

蜂の巣にされた凄惨な遺体があった。
「ひでぇ事しやがる…」
源蔵の背後で遺体を見た佐嶋はそう呟くと、目を瞑って手を合わせた。源蔵は無言で、再びその遺体にブルーシートを被せた。
「殺されたのは所員だけか？」
源蔵は同行していた鑑識に聞くと、鑑識はバインダーに挟んだ資料を捲った。
「いえ、他にも収監されていた政治犯も全て殺されています」
「口封じのつもりか…外道が」
武蔵は吐き捨てるように言った。当然の反応だ。仮にも同じ釜の飯を食った囚人達を、解放するのではなくその場で殺したのだ。源蔵たちは保管された遺体の列に、再び黙祷した。
その時だった。不意に、武蔵の横にいた軽巡棲姫が外の方向を向いたのだ。それに気づいた佐嶋は、軽巡棲姫に声をかけた。
「ん？どうした、軽巡？」
『ナニカ…殺気ヲ感ジル…』
その言葉を聞いた源蔵らは、周りを見渡すが、何も感じなかった。
「……？別に何も感じないが？」
『狼ノヨウナ…鋭イ殺気デス…感マセンカ？』
「気のせいだろう。さ、早く次行くぞ」
源蔵はそういうと、3人はブルーシートの外に出た。それを遠くで見つめる影がいるとも知らずに…

＊

それから数日後、梅安と矢矧は音羽屋を訪れた。日進から、新しい仕掛の依頼が来たという報告を受けたのである。
茶室に着いた2人には、既に半右衛門がそこに待っていた。
「お待ちしてました」

梅安と矢矧は、軽くお辞儀をすませ、手前の座敷に座ると、直ぐに本題に入った。
「で、今度の仕掛けの的は？」
「数日前に小田原の政治犯収容所を脱獄した江戸島権蔵を覚えておりますか？」
「ええ…もしや…」
矢矧が察した時、半右衛門はニヤリと笑うと、仕掛の的を明かした。
「察しの通りです。今回の仕掛けの的は、江戸島権蔵と、その脱獄を手引きした新日本赤軍の構成員１２名の仕掛けです」
半右衛門はそういうと、前金を梅安の手前に置いた。それを見た２人は、前金の額がいつもの倍ある事を悟った。
「前金２０００万ですか…〔起こり〕はかなりの大物と見ました」
「時間をかけてもよろしい。それも今回は相手が多いですから、助っ人の仕掛人を呼ぶのも許します」
半右衛門の話を聞き終えると、梅安は前金の半分を懐にしまうと、残りを矢矧に手渡した。
「引き受けましょう」
そういうと、梅安と矢矧は茶室から退室した。
その時、梅安は座敷にお膳を運ぶ1人の外人の女中を見た。綺麗な、しかも美しい金髪の外国人の女中だった。
「……」
「…提督？」
しばらく見とれて我を忘れていたが、矢矧の声で、梅安ははっと我に返った。
「大丈夫？」
「ああ…大丈夫だ」
そういうと、２人は鎮守府に戻った。

＊

鎮守府に戻った梅安と矢矧は、すぐに支度のため自室に入った。
梅安は自室の棚から砥石を取り出し、水に浸すと、懐から殺し針を取り出し、それを研ぎ始めた。
その時、自室の扉が開き、1人の艦娘が梅安の部屋に入ってきた。その艦娘は、右手に手持ちサイズの筒を持っていた。
梅安はその気配を感じ取ると、研いでいた殺し針を人差し指と中指の間に挟んだ。
「俺を殺すなら、そんな剥き出しの殺気は出さねぇ方がいいぜ…阿賀野」
梅安がそういうと、背後の艦娘は筒を懐にしまうと、ニコッと笑うと、その場に座った。
「流石は梅安さん。私もまだまだね」

軽巡阿賀野…第13鎮守府第4水雷戦隊の旗艦を務めるこの艦娘は、梅安にとっては古い付き合いの仕掛人である。梅安は阿賀野と組むときは、基本大がかりとなる仕掛けが常であり、今回のような多人数を仕掛ける場合ではいつも阿賀野の助けを借りていた。

阿賀野の言葉を聞くと、梅安は自分の取り分を引いた500万を阿賀野に手渡した。
「今回の仕掛けってもしかして阿賀野と能代の助けがいるほどの大物？」
「ああ、それも結構骨の折れる大仕事だ」
「相手は？」
阿賀野の問いに、梅安は殺し針を研ぎながら答えた。
「新日本赤軍最高幹部、江戸島権蔵と、その手下12名」
「ほえ～…」
それを聞いた阿賀野は、ひょうきんな声を上げた。当然であった。

こちらは４人、相手は権蔵合わせて１３人。４人でもやれるかどうかは微妙であった。
能代と矢矧は、刀を多用する仕掛人だから多人数でも然程支障はないが、梅安と阿賀野はスニークキルに長けた仕掛人であるため、多人数戦は論外であった。
「段取りはどうするの？たとえ的の場所がわかっても、能代と矢矧は問題なくても私と梅安さんじゃあせいぜい合わせて４人が限度よ？」
「それに相手はチャカを持っている。マトモにやりゃあ自殺行為だな」
梅安は２本目の殺し針を研ぎながら言った。
「そこでだ。今元締に頼んでもう１人助っ人を用意させている」
「もう１人？一体誰なの？」
さあな。と、梅安は答えると、梅安は３本目の殺し針を取り出した。

殺し針の先端が、キラリと光った。

＊

翌日の深夜、日進は平塚にいた。裏の情報筋から、権蔵によく似た男が、手下の男衆を引き連れて平塚にある老舗料亭〔駿河〕に入ったという事を聞いたのだ。
日進は屋根に上ると、慣れた手つきで屋根裏の隙間に入った。
その頃、旅館の広間では、権蔵をはじめ新日本赤軍の構成員が集結していた。
「で、正門の守りはどうなっている？」
「思っていたより手薄です。当直の守衛が４人体制の６時間交代で

す」
「武装も拳銃1丁だけなんで、どタマに一発入れれば楽に侵入できます」
　手下の報告を聞いた権蔵は、ある図面を懐から取り出した。図面には、〔第七鎮守府〕と書かれていた。
「いいか、今回の襲撃の目的は、我ら新日本赤軍の崇高なる目的を邪魔する海軍警務隊の総本山である第7鎮守府を壊滅させる事にある。奴らがいる限り、我らの行動に支障をきたす。奴等が寝ている隙に少人数で押し入り、鎮守府営舎と資材保管庫にプラスチック爆薬を仕掛け、奴等が目覚める前に時間をセットし、爆発させる。この作戦の支度は、予てより我が同志達が箱根山中に建設した〔別荘〕で行う」
　権蔵の説明を、構成員は無言で聞いていた。
「既に逃走経路は確保している。奴等の鎮守府が爆発している頃には、俺達は既にこの国とはおさらばだ」
　そういうと、権蔵は手下の一人ひとりに偽の身分証と航空券を配った。航空券には、
〔羽田発→北京着〕
　と書かれていた。全員分配り終えた権蔵は、手を叩き、女中を入れた。
「今日は前祝いだ！思う存分呑め！」
　それと同時に、女中が膳を置き始めた。
　そして、宴が始まった。誰1人、屋根裏の〝鼠〟に気づく事もなく…

＊

　その頃、半右衛門は近くにある釣り堀に来ていた。無論、1人ではない。そこには、先刻座敷女中をしていた外国人がいた。

正確に言うと彼女は外国人ではなく海外艦であり、名をビスマルクといった。乞食同然の身を半右衛門の妻である三笠が手を差し伸べ、音羽屋で働く事になったのである。

「一体どういうつもりなのかしら？」
ビスマルクは、釣りに興じる半右衛門を見ながら言った。
「はて…？なんの事でしょう」
半右衛門は惚けたが、ビスマルクはそのまま続けた。
「乞食同然の身の私を女中に雇って三月…その間の親切、貧乏人のひがみではないけど、ただ事とは思えないわね」
「何か、『下心があるのではないか？』と、仰るので？」
「そうではないけど…」
ビスマルクはそういって、半右衛門から目を背けたが、今度は半右衛門がビスマルクの方を向いて答えた。
「実はそうなのですよ。実を言うと、あなたの腕を見込んで頼みたい事がありましてね…」
「私の腕？そう言ってもあなたは…」
今度はビスマルクの方がとぼけたが、半右衛門は真剣な眼差しで続けた。
「存じてますよ。先だっては人違いで無実の人を殺しかけたが、君は既に〝新日本赤軍の幹部〟を3人撃っておいでだ！」
《推奨ＢＧＭ：西村佐内》
半右衛門がそう言った途端、ビスマルクは顔を変えて立ち上がると、懐にしまってある銃に手をかけた。それに対し、半右衛門は袖に隠したデリンジャーピストルに手をかけた。
「やはりばれていたのね。流石は〝鬼の半右衛門〟」
「やはり、私の裏の顔を知っていましたか。流石は〔連邦情報局〕のスパイですな」
「表向きは料亭主人を装い、裏では殺しの請負、上手いこと考えたわ

ね」
　ビスマルクの正体は、ドイツの諜報機関〔連邦情報局〕のスパイであった事を、半右衛門は既に悟っていたのだ。
「それで、私をどうする気？〔仕掛人の掟〕とやらに従いここで消す気かしら？」
「いいえ、実は貴方に〝頼み事〟をお願いしたくてね」
　半右衛門は、釣竿をしまいながら答えた。
「どんな事かしら？」
「断っておきますが、聞いたら最後、もし誰かに口外すれば貴方の命はないと覚えてもらいます。たとえそれが〝貴方の上司〟であっても
ね」
　半右衛門の言葉を聞くと、ビスマルクは懐から手を離した。

＊

　数刻後、半右衛門とビスマルクは茶室でその〝頼み事〟について話し合っていた。
「新日本赤軍の最高幹部、江戸島権蔵とその手下１２名の仕掛けの手伝いね」
「口止め料として、貴方には２００万を私に払ってもらいますが、その分貴方には４００万の仕掛け料を頂き、且つ貴方自身の目的も達成できる。悪い話ではないと思いますよ」
　ビスマルクは茶を啜り、渋る仕草を見せた。確かに悪い話ではない。本局からの指令は〔新日本赤軍の壊滅〕であり、それを勧められる事に越した事はないが、その代償として人殺し稼業の片棒を担ぐ事が、どうにもビスマルクの決断を渋らせた。
　その時、ビスマルクの背後の戸が開いた。戸には梅安が殺し針を右手に持って立っていた。
「断る手はないぜ。それにあんたは俺に借りがある。今度の仕掛けで

あんたは俺の借りを返す事ができる。悪い話じゃないでしょう？」
梅安の言葉を聞きながら、ビスマルクは懐に手をかけた。
「やはり貴方も…」
その瞬間、ビスマルクは懐からスコフィールドを取り出して銃口を梅安の眉間に向けた。向けたが、撃鉄を下ろさなかった。
「……なぜ撃たない」
その問いに、ビスマルクはニコッと笑うと、こう答えた。
「貴方がＮａｄｅｌ（針）を止めたからよ」
ビスマルクの喉元に、梅安の殺し針が手前で止まっていた。
２人は互いの殺し道具を懐にしまうと、座敷に座った。
座ると、ビスマルクは半右衛門にこう答えた。
「その話、乗ったわ」

＊

その日の夕方、極力照明を絞った第１３鎮守府の提督執務室に、梅安以下、５人の人間が集まっていた。そこに、天井から日進が入っていた。
「で、どうだ？」
「今春日姉が見張ってますが、奴等明日の夜中に押し込むようです」
「どうするの？」
「厄介ですが、奴等のアジトに乗り込むしか手はありません」
「手筈は？」
ビスマルクが聞くと、日進は懐から折り畳んだＡ１サイズの紙を取り出した。

「アジトの図面と周辺の地図は手に入れました。少々荷は重いが、よろしく頼みます」
《推奨ＢＧＭ：荒野の果てに～鏑木創アレンジｖｅｒ．～》
日進の報告を聞くと、能代は立ち上がり、ビスマルクに擦り寄り、低い声で言った。
「新入りさん。ヘマしたら…その首が飛ぶわよ」
それに対し、ビスマルクはガンつけて答えた。
「貴方もね。Ｇｅｌｂ　Ａｆｆｅ」
それに対し、能代は舌打ちしてその場を去った。それに矢矧、阿賀野、日進が続き、最後にビスマルクが静かに退室した。
１人残った梅安は、唯一執務室を照らしていたＬＥＤランタンの電源を、静かに切った。

仕掛けは、今夜―

＊

それと同じ頃、第７鎮守府は慌ただしい空気の中にあった。それは、今から約３時間前に遡る。

その日、丁度今日の執務を終えた源蔵に、〝軍令部〟からある指令書が届いたのだ。それは、大本営直属の諜報機関が、新日本赤軍の本部の居場所を特定したという内容であった。場所は、かつて南西諸島海域の絶対防衛線であった〔沖ノ島〕。源蔵はこれを好機と見て、警務隊に出動を命じたのである。

《推奨ＢＧＭ：捕り物のテーマＩ》
時刻は、１８００時を回ろうとしていた。
「武蔵、時計合わせ！」
「了解！」
武蔵達が、全員腕時計に目を合わせた。
「5、4、3、2、1、0！」
時計の秒針が、１２時の方向を回ったその時、源蔵は号令を出した。
「良し、総員抜錨！暁の水平線に勝利を刻め！」
源蔵の号令と同時に、鎮守府の艦娘出撃用カタパルトから、主力艦隊が勢いよく出撃し、源蔵を乗せた指令艦が、ゆっくりと大海へ走り出した。
「しかし、〝大本営〟の情報部も偶には仕事をしますな」
源蔵の隣にいた佐嶋が皮肉そうに言った。それを聞いた源蔵は、不敵な笑みで答えた。

実際には、新日本赤軍のアジトが沖ノ島には存在しない事は、源蔵らは既に承知していた。指令書の正体は、半右衛門が源蔵宛に出した密書だった。この時源蔵は、権蔵がこの第７鎮守府に押し込みをかける事を知り、万一に備えて鎮守府には囮の警備隊を残して全隊を沖ノ島に退避させようと考えたのだ。艦隊が足の遅い指令艦の護衛をしながら鎮守府→沖ノ島海域間を往復するのに丸２日かかる。資材は後で遠征や任務を遂行すれば手に入るが、艦娘と人員は失えば２度と戻らないのだ。源蔵に選択の余地はなかった。

（後は、梅安達に任せるか…）
そう思いながら、源蔵は暗い太平洋を眺めた。

＊

深夜の箱根山中、そこにあるなんの変哲も無い木造瓦葺き平屋建の別荘こそ、新日本赤軍権蔵一派のアジトだった。

「いいか！いよいよ明日、我らはにっくき海軍警務隊の総本山に突入する！決して楽な道では無いが、この作戦が成功すれば、我らの行く手を阻むものはいなくなる！この国を我らの赤旗に染めようではないか！」

【オウ！】

地下の広間で、権蔵が部下を鼓舞すると、部下達は一斉に右手を上げて吠えた。権蔵は手下達の声を止めさせると、高らかに叫んだ。

「同志万歳！阿修羅に死を！」

権蔵の叫びのすぐ後、部下達は右手を鼓舞してそれに続いた。

【阿修羅に死を！阿修羅に死を！阿修羅に死を！】

だが彼等は、これから自らの身に降りかかる災厄をこの時点では知らなかった…

《推奨ＢＧＭ：仕掛人梅安》

その時、天井裏から鋭い音と共に走りでたものが、細い閃光の尾を引いて、権蔵の右隣にいた手下の１人の眉間に突き立った。

ブシュッ！

「ぐぉっ!?」

眉間に深々と突き刺さった針から、即効性の毒が男の身体中に廻り、遂に口から血を出してその場に倒れた。
「!?どうした!・同志山田!・しっかりしろ!」
隣にいた権蔵がその男に駆け寄り、身体をゆさぶるが、既に事切れていた。
この時権蔵は、何者かがこの屋敷に侵入した事を察した。
「曲者だ!・であえ!・であええー!・」
権蔵の掛け声と同時に、広場にいた者達は一斉に退室した。
その様子を天井裏で見ていた阿賀野は、手に持っていた吹き矢を懐にしまうと、すぐにその場を離れた。
広間を出た権蔵の部下は、手分けして侵入者の捜索にあたった。6人が玄関を、3人が庭を、2人が1階の探索にあたった。
「まだこの中にいるはずだ!・草の根をわけて探し出せ!」
1階についた手下の1人が、叫びながら言った。だがそれが最後の言葉となった。
ドシュッ!
「!?!?!」
手下の1人とその横にいたもう1人の手下が、声にならない悲鳴をあげた。その背後には、黒装束を身に纏った梅安が、2人の男の盆の窪に深々と殺し針を刺し込んでいた。
梅安は針を抜き、廻りを見渡した後、その場を離れた。しばらくして、息絶えた2人はその場に倒れこんだ。

＊

《推奨BGM：紫煙立ち上る時》
玄関の方に向かった6人の手下は、懐から匕首を取り出し、玄関の扉を勢いよく開けた。すると、そこには抜刀状態の能代と矢矧が待ち構えていた。

「な、なんだてめえら！」
能代と矢矧は、無言で手下達に無常の刃を振り下ろした。
バシュッ！
「「グァッ!?」」
ドシュッ！
「「ウェッ!?」」
前の４人が斬り殺されると、背後の２人は尻込みを始めた。
「ま、待ってくれ！殺さないでくれ！」
「い、命だけは助けてくれ！」
２人の命乞いも虚しく、能代は腰に差した「兜割り」を抜くと、左の男の胸に刺し込んだ。
ドスッ！
「ガハッ!?」
それと同時に、矢矧は両手に持っていた長ドスでもう１人の男を斬り裂いた。
ズバッ！
「ギャッ！」
断末魔の悲鳴を上げて、２人は倒れた。能代と矢矧は刃にこびりついた血を払い、刀を鞘に収めると、その場を離れた。

＊

一方、庭の方に向かった３人の手下の前に、腰にガンベルトを巻いた男装のビスマルクが立ち塞がった。
「だ、誰だ貴様！」
手下の１人がそう言うと、ビスマルクは重く、低い声で答えた。
「地獄から迎えにきた戦乙女（ヴァルキューレ）よ」
そういった瞬間、ビスマルクは腰のホルスターからスコフィールドを取り出してものすごい早さで３人の眉間を撃ち抜いた。

ズドン！
「「グワッ!?」」
３人は音を立てて崩れ落ちた。その時、ビスマルクの右肩を激しい苦痛が襲った。
ブシュッ！
「くっ!?」
ビスマルクの右肩から赤い血が流れる。ビスマルクは左手で右肩を抑えながらその場に座り込むと、背後を振り向いた。
そこには、右手にマカロフを構えた権蔵が立っていた。
「江戸島権蔵…」
「へっ…ドイツの女（アマ）か」
権蔵はかねてより組織からドイツのスパイが自分の周りを嗅ぎ回っている事を知っていた。そして、そのスパイが〝ある事件〟に関わった者を消している事も知っていた。その事件とは、４年前に権蔵が計画し、実行したものであった。
「権蔵…忘れたわけじゃないでしょうね？４年前のキール軍港爆破テロ事件…あの日からずっと私は貴様を追ってきた…貴様に殺された妹の仇をとるために…」
「へっ、御大層な女だ。今更そんな昔の話を穿り出してなんになる？所詮貴様は国の犬よ。だが俺は違う。俺には力がある！その力でこの世界を変える！深海棲艦との戦争を再開し、そして駆逐する！その為には貴様等艦娘が１番の障害だ。だから俺はキールを爆破した。それだけだ」
権蔵はそういうと、銃の撃鉄を起こした。
「貴様はただでは殺さん。両肩を撃ち抜いた後にその躰を犯しつくしてから眉間を撃ってやる…」
源蔵は銃を構えたまま、座った状態のビスマルクに近づいた。
「最後に言い残すことは？」
権蔵がそういうと、ビスマルクは権蔵の顔に唾をかけて答えた。
「Ａｒｓｃｈｌｏｃｈ！…（クズ野郎が…）」
それを聞いた権蔵は、怒りを露わにして銃の引き金を引こうとし

た、その時
《推奨ＢＧＭ：仕事人から一言～中村主水のテーマ～》
ドシュッ！
「???!」
!!
権蔵は、声にならない悲鳴をあげて、手に持っていた銃を落とした。
その背後には、権蔵の盆の窪の急所に殺し針を深々と刺し込んだ梅安がいた。
「狙撃手が１番警戒するのは…背後からの敵だぜ…！」
梅安はそういいながら、殺し針を抜いた。
殺し針を抜いた途端、権蔵はその場に倒れこんだ。
梅安は座り込んだビスマルクに近寄った。
「また貸しができたな」
「ええ…」
そういうと、梅安とビスマルクは息絶えた権蔵に目をやった。
「４年前の爆破テロの実行犯がまさか権蔵だったとはな…」
「妹の仇だった…」
「……そうか…」
ビスマルクの言葉に、梅安はそう答えた。

＊

その日の深夜、箱根山中にある木造瓦葺き平屋建の別荘から火が出たという通報が地元消防署に届いた。火は６時間後に消し止められたが、全焼した別荘の焼け跡から、男性１３人の焼死体が見つかった。いずれの遺体も、身元を特定する情報が得られなかったため、地元の共同墓地に埋葬された。
後日、この火事は『事故』として処理された…

＊

数日後、梅安とビスマルクは出雲丸にいた。あの後、梅安はビスマルクを鎮守府に連れてきて、傷の手当をしたのだ。
「傷は、大分癒えたな」
「流石は〝海軍一の鍼医者〟ね」
ビスマルクが茶化すと、梅安は苦笑いをして酒を飲んだ。
「お前さん。これからどうするね」
「まだ私の任務は終わってないわ。音羽屋で女中をしながら、また情報収集ね」
「そうか…」
そういうと、梅安は再び酒を飲んだ。
「それじゃ」
ビスマルクは立ち上がると、個室の扉を開けた。
「おう、またな」
梅安が答えると、ビスマルクは少し笑みを浮かべて店を出た。
（スパイにしておくには、惜しい女だな）
梅安はそう思いながら、三たび酒を口にした。そのすぐ後、飛鷹が膳を2つ持って入ってきた。
「あら？もう1人の連れはどうしたの？」
「ああ、今さっき帰った所だ」
「そんなぁ～、折角鯛の尾頭付き持ってきたのに」
膳には、この時期が旬の鯛の尾頭付きがほのかな匂いを漂わせてのっていた。

艦これ仕掛人其の弐『夕陽の仕掛人』
終劇

歳末大仕掛

朝夕めっきり冷え込む霜月（11月）の半ば……

その日、おひろめの日進は一人で人々が行き交う商店街を歩いていた。

日進の視線の先には、一人の男が歩いていた。

その男はどこか整然とした佇まいで、どことなく〝世の中に達観している〟ような顔をしていた。

なぜ日進がこの男をつけているのかというと、言わずもがな〝仕事〟である。

＊

一昨日、音羽屋に一人の男が訪ねてきた。

男の名は浦安で就職支援事業を行なっている〝山田屋久兵衛〟という男である。

この久兵衛という男は、表向きこそ就職支援事業という慈善事業を行なってはいるが、その正体は半右衛門と同じ仕掛人の〝蔓〟である。

その久兵衛が、血相を変えて音羽屋に入ると、直様半右衛門との面会を所望し、中庭の茶室に案内した。

「久兵衛さん。今日は一体如何なる用で？」

「いや、実はな半右衛門さん。これはお前さんにしか頼めぬ依頼なのだよ」

「というと？」

「実は…」

久兵衛は横に置いていた鞄を開いて、札束を半右衛門の手前に置いた。

「一月前、ある起こりからの依頼で急ぎの仕掛を請け負ったのだが、こ

れがなんとも難しくてな。今までに手前の仕掛人を2人差し向けたが……返り討ちにあってしまってね……」
「起こりは焦っているのかね？」
「かなりね……仕損じたことを伝えたら物凄く怒っていたよ。しかし、相手は相当な手慣れでね、他の仕掛人にも頼んだんだが、下見の段階で依頼を断る奴らが続出してしまってもうてんてこ舞いだよ」
「なるほど……で、困り果てて私に頼みこんできた、ということか」
「まあ、そんなところだ。蔓が蔓に頼むのは癪だが、もうお前さんしか頼れる奴はいないんだ。頼む！仕掛料は弾むから引き受けてはくれないか？」
「……」
半右衛門は腕を組んで思案していた。それも当然だろう。
本来、蔓が起こりとして他の蔓に仕掛を依頼することはまず有り得ないし、あってはならぬことだ。
仮にそのようなことが起きた場合、多くは
「なにか、訳ありの仕事」
ということになる。
しかし…事が急ぎで、しかも仕損じているとなれば、仕掛人に対する信用問題に成りかねなかった。
半右衛門は、置かれた札束を手に取ると、懐にしまった。
「ところで久兵衛さん」
「ん？」
「的は、殺(や)られても仕方がねえ奴だろうね？」
「無論だ、私が保証する。しかし半右衛門さん。起こりは急いでいるから、なるべく早く、な」

＊

―そして、今に至る。
日進は半右衛門の依頼を受けて的の動向を探り終えると、その帰り

で第１３鎮守府を訪ねていた。
　提督である輝梅安（ひかりばいあん）は書類の整理を行っていた。
「提督業を疎かにしては何かと上に言われるからね。いやなに、提督業と軍医を掛け持ちしているとこういう苦労しかないよ。ふふ……」
「梅安さん。酒を買ってきたよ」
「おう、そりゃすまねぇな。じきに終わるから、そこで待っていてくれ」
「じゃ、お言葉に甘えて…」
　日進はそのまま執務室のテーブルに座ると、梅安は書類整理をササッと済ませて厨房に入った。
「悪いね梅安さん。夕餉（ゆうげ）の支度を任せちゃって」
「気にすんな日進。好きでやってることだしな。今日は大根を煮ながら食おう。冬が近づくとこれが躰にいいんだ」
「へぇ、そりゃいいこと聞いたよ」
「日進、今日は何処に行ってたんだい？」
「ん？ちょっちね…」
「日進…〝仕事〟か？」
「あっしの顔にそう書いてあったかい？」
「少なくとも俺はそう読んだよ。蔓は、まぁ言わずもがな元締だろうがね」
「へっ…流石は梅安さんだ。浦安の山田屋久兵衛が起こりでね」
　日進は隠さずに言った。なにせ梅安と日進は長い付き合いである。そのため日進は
（梅安さんなら、なにを話したっていい）
　と、思い極まっている日進であった。
「山田屋というと、あの辺の仕掛人の蔓を行っている元締じゃねえか。蔓が蔓に〝仕事〟を頼むたぁ、穏やかじゃないね」
「そう、そこで元締に下調べをね…」
「相手は？」
「脱走兵らしいんだが、これが中々の手慣れでね…山田屋の話だと、この仕掛を受けた仕掛人二人が返り討ちにあったって話だ」

「なるほど……それで泣き付いてきたのか」
「山田屋曰く、起こりはかなり急いでいるらしくてね、年内に仕掛けてほしいとさ」
「ほほう…」
「7月頃までは、第89鎮守府の嶋田英夫中将の部下だったってことは、山田屋が漏らしてくれてね」
「ふむ…山田屋久兵衛は、恐らくその鎮守府に出入りしているのかもしれねぇな」
「ま、そんなとこだろうね」
「どこに住んでるんだい？」
「深川の門前仲町にある寺院墓地の隣にある一軒家に住んでいるんだけど、どうも薄気味悪い場所でね…」
「あの辺は昔、死刑囚の刑務所が近くにあったからね……」
「なるほど。どうりで、ね……」
日進は声をのんだ。
日が暮れてから、テーブルのコンロへ土鍋をかけて、ここに出汁をはった。笊に千六本に刻んだ大根を山盛りにし、別の笊には浅蜊の剥き身が入っていた。
鍋の出汁が煮えてくると、梅安は大根の千六本を手掴みで入れ、浅蜊も入れた。刻んだ大根はすぐに煮えあがり、それを浅蜊とともに引きあげて小皿へとると、七味蕃椒を振って二人は、汁と一緒にふうふういいながら口へ運んだ。
「お、こりゃうまいねぇ～」
「冬が近づくと、これがいいんだ」
酒は、茶碗で呑む。
「時に日進」
「ん？」
「こんどの〝仕事〟は、どういう…」
「蔓は言うまでもねぇですけど鬼の元締ですから詳しくは聞きませんでしたけど、どこか〝世捨て人〟じみた風貌でね……あの様子だから、上司はもとより、色んな人に迷惑をかけてきたんじゃないのか

ねぇ」
「なるほどね……」
「いやしかし、今日は良く呑んだ」
「そろそろ〆にするか？」
「そうだねぇ…」
「今日は宿舎の空き部屋を使ってもいいぜ」
「すまないねぇ、何から何まで」
「ふふ、いつも〝仕事〟で世話になってるからな…」
それから二人は、炊きたての飯へ大根と浅蜊の汁をたっぷりとかけて、さらさらと掻き込むようにして食べた。

＊

翌朝、日進が帰ってすぐ、梅安は提督業を本日の秘書艦である鳥海に任せると、鎮守府内にある診療所で艦娘たちの治療に勤しんでいた。
鎮守府内では梅安の鍼の効能はたいしたものであるため、時には他の鎮守府から鍼の治療を受けに来る者もいる。
梅安は忙しなく働き、午後二時を過ぎた頃に遅い昼食を済ませた。その後後片付けを済ませ、執務室へ戻ると……
「司令官、鎮守府正門前で民間人の方が司令官に面会を所望しております」
「面会？相手の人相は？」
「男性です。見た目はお坊さんなのですが、とても若々しくて…」
「ふむ……よし、ここへ通してくれ」
「わかりました」
それから数分後、執務室に一人の青年が入室してきた。その風体から、梅安は一目で恐らくどこかの寺の小僧と見た。
「さて、何か御用ですかな？」

「はい。実は、先生の腕を耳にしたものでございますから、是非とも往診を願いたいと和尚から申されておりまして……」
「往診ですか……場所は、どちらに？」
「深川の、永福寺という……」
「患者は、ここには来られないのかい？」
「身動きがとれませんので……」
「容体は？」
「どこもかしくも……あの、なんともうされますか……」
小僧の目が「あまり、聞かないでくださいませ」と梅安に訴えかけていた。
どうやら、訳ありらしい。
「わかりました。そういうことでしたらお伺いしましょう」
「ありがとうございます」
「いやいや、私も医者の端くれだからね」
すぐに、梅安は支度をすると、残りの提督業務を矢矧に任せて外へ出た。
港区にある第１３鎮守府から深川の永福寺まで、梅安は小僧の案内で道を進んでいた。
その道中、梅安はふと立ち止まり、振り向いた。
（まだ、後をつけている……）
第１３鎮守府の敷地を出てから、梅安はこの尾行者に感づいていた。どうも人を尾行けることになれていないらしく、とうてい梅安のするどい五感を晦ますことは出来なかった。
長身の男である。顔はマスクと深々と被ったハンチング帽のせいで見えない。ジャケットを羽織り、キチンとした身なりなのだが、おそらく刑事ではないのは間違いない。
梅安が振り向くと、男は近くの塀に背を付けて佇んでいた。
梅安は緊張した。
これまで、仕掛人としてどれだけ多くの人をこの手にかけてきたか……
それこそ、どこの誰に恨みをうけているのか……

（知れたものではない）
のである。
それは、梅安と同じ仕掛人である阿賀野や能代、矢矧も例外ではない。
ふと気が付くと、先を歩く小僧の顔が微かながら狼狽えていた。
ちらりと、小僧の視線が彼方の青年へ走ったのを、梅安は見逃さなかった。
（この小僧は、あの青年を知っているらしい……ということは、あの青年と永福寺には、なにか関わり合いがあると見てよい。すると、これから私が往診する病人というのも、あの青年と……）
そうした思念が梅安の脳裏にうかんだのも、一瞬のことであった。
「さ、案内を……」
小僧に声をかけ、梅安はさりげなく道を進んだ。
ほどなくして、梅安は永福寺に到着した。
病人は本堂内の裏側にある、暗い一間に寝かされていた。どうやら艦娘……しかも、大和である。その病間まで、小僧と和尚が付き添ってきた。
暗い部屋ではあるが、暖房はよくきいており、仄かに薬湯の匂いがこもっていた。
大和を診察した梅安は、あきれたように
「これは一体……どうしてこうなるまで放っておかれた」
と、和尚にいった。
和尚はうなずいてから、小僧と顔を見合わせたが、黙っている。
「これは、あまりにひどい」
肌は、ぬけるように白いのだが、一口に言えば
（骨と皮ばかりに、痩せおとろいている）
のである。
膨らみを失った乳房のあたりに、点々と痣のようなものがうき、腹や腰などの各部に打撲傷（うちみ）をうけている。この寺で膏薬を塗ったり、薬湯などを飲ませたりしたらしいが、そんな素人療法ではどうにもなるまい。

ならばなぜ、病院に入れなかったのか……
そこには、どうやら深い訳があるらしい。
内臓も、方々が痛んでおり、どうやら心身の苦痛が並大抵のものではなかったと見える。
大和は、細い眉を寄せて、鼻筋をかすかにふるわせながらも、しっかりと両目を閉じて、梅安の問いかけに対し、頷いたり、わずかにかぶりを振るのみで、肌身の諸法を梅安の肉の厚い掌が押したり、擦ったりするたびに、血の気が引いた唇から嘆息をもらしたり、呻き声を発した。
「とりあえず……」
いいさして梅安は、治療箱から器具を取り出して、治療に取り掛かった。
治療にはかなりの時間を要し、梅安の額からは、じっとりと汗が光っていた。
「おお……」
梅安の背後で、声が聞こえた。
治療が終わったとき、病人の大和が安らかな寝息をたてているのを見たからであろう。
振り向くと、いつの間にか小僧の姿がなく、和尚だけが座っていた。
「先生、かたじけのうございます」
と、和尚が丁寧に礼を述べた。
「ところで、私のことを誰からお聞きになりましたか?」
と、梅安。
「仙福寺の、和尚から……」
「ほほぉ……」
仙福寺は、第13鎮守府からも近く、そこの老和尚は躰の具合が悪くなると、他の医者には見向きもせずに、梅安の治療を頼んでいた。
「仙福寺で聞いた先生の評判とそのお人柄なればと思い、こうして思い切って頼んだのです」
「思い切って……」
「左様です」

梅安の不審を、和尚はいささかもたじろがずに受けとめたが、それ以上のことはなにも言わなかった。
秘密の臭いはいよいよ濃厚になってきたが、もとより梅安にとって関知するものではない。痛みつくしたこの艦娘の治療を施すだけのことだ。
だが、梅安は病間を出る際、和尚にこういった。
「この件は、決して他言いたしません」
すると、深く頷いた和尚が両手を合わせて、梅安を拝む形になったのである。
和尚と小僧に見送られて、梅安が門を出ようとしたとき、鐘楼の陰に、ちらりとハンチング帽がのぞいた。
(あの男、まだ俺を張り込んでいる)
梅安はそれを意に反さず、何食わぬ顔で寺を後にして、道なりに歩きながら、左に曲がった。鎮守府へ帰るなら、右に曲がった方向にあるバス停に向かわねばならないはずだ。
それを左へ曲がった。曲がったかと思うと、あたりに人影がないのを確認した輝梅安は風を巻いて走った。
弾みをつけた梅安の躰が、とある家の塀の上に舞い上がったのである。
松の大樹が、枝を塀の外まで広げており、梅安はその陰に身を寄せて、彼方を注視した。
すると、後から梅安を尾行けていた青年が現れると、梅安がバス停に向かったと思いこみ、急ぎ足で引き返した。
それを見た梅安は、塀から飛び降りた。
(今度は、俺がつける番だ)

＊

青年の尾行を軽々とやり過ごした輝梅安は、そのままその青年を

尾行していた。
もう、とっくに日は暮れている。
尾行しやすくもあり、し難くもある。青年のジャケットが黒いこともあり、尚更であった。
長身の青年は一度も振り向くことなく道を進んでいくと、なんと門前仲町の方向へ向かうではないか。
（まさか……）
と、思ったけれども、昨夜、日進が探りをかけているという相手を『深川の、門前仲町の寺院墓地の隣にある一軒家に住んでいる長身の青年』
と、梅安に告げた言葉が、いやでも脳裏によぎっていた。
（まさか……）
だが、どうやら日進が今、探りをかけている相手と同じらしい。
深川・門前仲町の寺院墓地の隣にある一軒家の中へ、青年が入っていくのを、輝梅安は見届けたのである。
それは、一軒家にしては妙に寂れた小屋のようなものであった。
青年が小屋に入っても、灯りはつかなかった。
梅安は街灯の中を、あくまで密やかに小屋へ近づいていった。
（こいつぁ、一体どういうことだ？俺はまだあの青年の殺しを頼まれてはいない。まだ探りの段階だ。それなのに、あの青年は何故、俺の後をつけたのだ？日進が己の様子を探っていることを知った青年が日進の後をつけるのなら、話はわかる。だが、どう考えてもあの青年は日進が探りをかけている相手に違いない。さて…どうしたものか……よし、兎も角も、奴の顔を見てやろう）
しかし、見ようにも、まだ小屋に灯りがともらなかった。
じりじりと、梅安は小屋に接近した。
戸口は、一つしか見当たらない。
夜の木枯しが鳴り響いた、その時だった。
「もし、そこのお人……」
突然、小屋の中から青年が、外で屈んでいる梅安に声をかけてきたのだ。

その声に、梅安は動きを止めた。
「貴方も大きな躰らしい。そこに屈みこんでいては膝が苦しいでしょう？」
「……」
「心配をなさるな。今日、私が貴方を尾行したのは、貴方に危害を加えるつもりではなかった。どうか、無礼をお許し頂きたい」
低く、整然としているが、梅安の耳に、青年の声はよく通った。
「今日、貴方が永福寺で治療してくださった艦娘のために、貴方がどのようなお人かこの目で確かめておきたかった。それだけのことです」
「それで？」
と、はじめて梅安が問い返した。
「途中、貴方を見失ってしまった。貴方が鎮守府に入るまで見届けたかったのだが……」
「なぜだね？」
「貴方が永福寺で見たことを第三者に告げ口されると、困ると思って……」
「それで？」
「この家に帰る途中、誰かにつけられていると感じた。貴方だろうと思った」
「それで？」
「まぁ、入ってください。こうなれば隠しておいてもお互いのタメになりません。私の話を聞いてもらった方が、あの娘の治療をしていただくためにも、よいかも知れません」
「では、入りますよ」
「灯りはつけません。つけたくても、つけられない事情がありますので」
「構いませんよ。こう見えて目は効くもので」
輝梅安は心を決め、ぬっと立ち上がると、小屋の中へ入っていった……

＊

同じ頃―

港区・赤坂の料亭〔万七〕の奥座敷で、山田屋久兵衛が立派な風采の軍人と二人きりで密談をしていた。

この軍人の護衛を務めている二人の部下は別室で待機していた。

「山田屋、彼奴の始末……どうなっておる？」

「はい。先だっては手前共の仕掛人二人が返り討ちに遭いましたが……まだ港区に、凄腕の仕掛人をてなづけている蔓がおります。その者たちに任せておけば、年内には片がつくかと……」

と、山田屋久兵衛がかしこまった口調で言うと、軍人が頷き

「そうでなければ困る」

と言った。

この軍人が第８９鎮守府の司令官を務める嶋田英夫中将であった。

この嶋田英夫は、輝梅安が着任している第１３鎮守府が所在している第２地方の筆頭提督を務めており、いわば、第２地方の総司令官ともいうべき存在である。

また、第２地方は帝都近海の守りを任された即応部隊としての側面を持ち、第２地方筆頭提督は、帝都近海を守る艦娘たちの指令塔なのだ。

「山田屋。その蔓の配下は、一体どのようなものか？」

「大丈夫でございます。なにせ、かなり腕が立つ仕掛人を従えていると聞きます」

「金ならいくらでもだしてやる。なれど、必ず〝石川久太郎〟を始末するのだ！」

傲然として、嶋田英夫が

「貴様には、それだけのことをいたす恩義がある筈だ」

「はい……」

役目柄、隠然たる実権を持つ嶋田英夫の口添えで、第２地方が雇用している非常勤職員を、いまは久兵衛が一手に引き受けていた。

その収益は、非常に大きいものであった。
「俺の役目のことを、よく考えてみよ」
「はい、重々承知しております」
「それ故に迂闊な事もできぬ。みすみす久太郎を野放しにしているのも、そのためだ。きゃつめ、帝都を出るならまだしも、これみよがしに帝都に残っている！まことにもって憎い奴、憎い……憎い！」
いいつつ、嶋田は小怪（こかい）な面貌（めんぼう）に怒気を発しながら、手にした扇子の先を畳に叩きつけた。

＊

その頃、輝梅安（ひかりばいあん）は小屋に入り、青年＝石川久太郎と酒を酌み交わしながら、彼の話を聞いていた。
「私は、小平のしがないサラリーマンの家に生まれだが、父が生粋の博奕狂（ばくち）いで、それ故に母は苦労して病死してしまい、父も喧嘩と借金の果てに、首を括ってしまった。いや、本当にひどいものだ。それから私は宝寿院の和尚に引き取られた。それが現在の永福寺の和尚でね。私が軍に入れたのは、その和尚が面倒を見てくれたおかげだ。その後嶋田英夫閣下に部門の腕を見込んで護衛を務めることとなり、いつも私をお傍に連れていった……が、嶋田閣下は途方もない好色でね。お忍びで街に出てわ、料亭の座敷女中にまで手を出す始末……つくづく、嫌になったよ。その時だった。閣下は参謀長の三沢清右衛門大佐の秘書艦である武蔵に凌辱の限りを尽くし、それを苦に武蔵は自殺したが……小心者の三沢参謀長はそれに目をつむった……それがいけなかった。次に嶋田は、武蔵の姉である大和に目をつけた。だが、大和は激しく抵抗し、嶋田の怒りを買ってしまった。殴る、蹴るなどの乱暴をされた上に、倉庫に監禁されたのだ……私は見るに見かねて、大和を助けだして永福寺の和尚に事情をお話しして匿ってもらったのだ」

「……」
石川の話を、梅安は黙って聞いていた。
だが、これで事情はわかった。なぜ永福寺に匿われている大和があのような惨い姿だったのか……それが聞けただけでも、梅安にはよい収穫であった。
石川は続けた。
「帝都を離れず、この小屋に留まっているのは、どこまでも嶋田英夫を戦うためなのだ。嶋田め、とても警務隊や特警隊には訴えられまい。そのようなことをすれば、私は堂々と奴の非行を申し立ててやるまでのことだ。刺客が来れば、切り捨てるまで！これまでに、ヤクザ者二人を返り討ちにし、先日も、春日型の艦娘が私を探っていた」
〝春日型の艦娘〟とは、恐らく日進のことだろうと、梅安はすぐに悟った。
「こうなった手前、もはや私も命がけ。嶋田がどのように出るか、手ぐすねひいて待ってやるまでだ」
「……」
梅安は、まだ黙っていた。だが、その心の内では、ある事を決めていた……
既に、窓から日の灯りが差していた……

＊

翌朝……
輝梅安は石川久太郎が籠っている小屋を後にすると、その足で日進が構えている駄菓子屋に向かった。
その道中、梅安は鎮守府に連絡を入れ、
「今日の昼までには帰る」
と、伝えていた。
梅安が日進の家に着いたのは、お昼前の１０時過ぎであった。

「どうしたんですか梅安さん。こんな時に……」
「日進、お前が一昨日探りに行ったことを、あの長身の青年は知っていたよ」
「へ？そりゃ一体……」
「昨日、その青年と会った」
「な、なんだって……」
「ああ、しかし確かに世捨て人じみた風貌だ。しかし日進、人は見かけによらぬものだぜ」
「そ、そりゃまたなんで……」
「あの青年の名は……性は石川、名は久太郎といってね」
「ちょ、ちょっと待ってくれよ。そもそもどうして梅安さんがその青年と会っているんだよ？」
「そうしてぇ所だが、まず飯にしてくれないか？朝飯を食べずにタクシーを飛ばしたから、もうクタクタだよ」
「へ、へぇ。梅安さんがそういうなら……」
いいながら、日進も緊張しているらしい。
眼の色を変えて台所に立って行き、棚から大きめのカップ麺を取り出すと、沸かしたお湯を入れて3分待ってから、割り箸と共に運んできた。
「これでいいかい？」
「あぁ、構わねぇ」
梅安はカップ麺を汁ごと一気に平らげた。
「茶を一杯貰えないか？」
「いいから早く話してくれないかい？」
「焦るなって……日進、耳を貸せ」
「えっ？へ、へぇ……」
梅安は日進の耳元に口を近づけると、昨夜のことを耳打ちした。
「な、なんだって……そりゃ本当かい？」
全てを聴き終えた日進は驚きはしたが、同時に怒りにあふれていた。
「あぁ、俺も最初は驚いたものさ。兎に角、この事を早く元締に知らせ

てくれないか？」
「わかったよ」
梅安はそういうと、日進の家を後にした……

＊

それから、数日後……
山本半右衛門は、山田屋久兵衛の呼び出しを受けて、赤坂の万七に来ていた。
「どうだい半右衛門さん。ある程度、相手は探ったのかい？」
「ええ、子飼の密偵を使いましてね……」
「強者だろう？」
「正攻法では、なかなか難しいでしょうな」
「だからこそ、貴方に頼んだのだ。そっちの仕掛人がどのような手段を取ろうが、そっちは貴方に任せる。この稼業はそう決まっている」
「確かに、その通りですな……」
薄く、半右衛門が笑顔を見せた。
その笑顔に、久兵衛は頼もしげに見やって
「な、頼みますよ半右衛門さん。首尾よく始末できたら、新たに５００万包んでもいいですよ。ん？」
「久兵衛さん。お互い、仕掛人の元締同士だ。こういった仕掛は、もう少し深い事情（わけ）を聞かねえと、手前の仕掛人は引き受けないだろうね。なにしろ相手はかなりの手慣れ……しかも仕掛人を２人返り討ちにしたほどだ。向こうも手ぐすね引いてこっちの出方を待ってるでしょうし……」
「〝石川久太郎〟」
苛立たしげに、久兵衛がいった。
「あの男は石川久太郎といってね。三年前に嶋田中将が中央に掛け合って部下にしなすった。だが、石川はその恩義を忘れて参謀長の三

沢清右衛門大佐の秘書艦・武蔵を姦通にした上に首を刎ねた。それに飽き足らず、その姉である大和を手篭めにした上にこれを拐かして、第８９鎮守府を脱走した。そん時に、管轄していた憲兵を二人叩っ斬った。どうだい？これなら満足だろう？」
「なるほど。なら何故、警務隊や特警隊にその事を知らせないんで？奴さんの居場所はわかってるじゃあないか？」
　すると、山田屋久兵衛が
「私は、それだけしか知らない。生かしてはおけない奴だ、と思ったからこそ、嶋田中将から頼まれた。半右衛門さん。そういうことは、貴方もよくわかっているはずだ。貴方も、仕掛人の蔓なのだからね」
「久兵衛さん。別に私は断るつもりはありませんよ。ただ、こういう稼業故、よく事情を聞いた方が良いと思いましてね」
「それならそうと最初に言ってくれ。では、日を限ろうじゃないか」
「はい」
　少し考えてから、半右衛門が
「年内には、必ず……」
　と、答えた。
「久兵衛さん。このことは、私たち二人だけの……」
「もちろんだ。それがこの稼業の掟だ」
「恐れ入りました」

＊

　その頃輝梅安（ひかりばいあん）は、永福寺本堂裏の病間で、大和の治療を行っていた。
「だいぶ顔色もよくなってきたね。今朝も、お粥を一椀食べたそうじゃないか」
「はい……梅安先生のおかげです」
　梅安は桶のお湯ですすいだ手を手拭いで拭き取ると、周囲に人気が

いないことを確認し、大和の耳元へ口を寄せ、
「君は……第８９鎮守府の大和だね」
ささやいたものだ。
大和は、ハッとした。
「心配はいりません。石川久太郎さんから聞きました」
「……石川さまは？」
間を置いてから、大和がいった。
「石川さまは元気でいる。安心しなさい」
「石川さまは……ご無事で……」
すると、大和は目から涙を流しながら
「良かった……良かった……」
と、安堵の笑みを見せた。

＊

その晩……
第１３鎮守府に戻った梅安は、自室に置かれた書置きを拾うと、その足で音羽屋を訪ねた。
書置きには、赤文字で
『四』
と、書かれていた。
音羽屋に着いた梅安は、そのまま茶室へ入った。
茶室には、既に半右衛門が待ち構えていた。
「おお、梅安さん。来てくれると思いましたよ」
「元締。毎度のことながら、手の込んだ呼び出しをなさいますね」
「はは。これを考えるのも私の趣味でしてね」
「御冗談を……」
半右衛門の笑顔に、梅安は少々苦笑するが、直様本題に入った。
「……で、話は？」

半右衛門は、アタッシュケースの蓋を開くと、中身が梅安に見えるように置いてから、話を始めた。
「仕掛の的は……第８９鎮守府司令官兼第２地方筆頭提督、嶋田英夫。仕掛料は、３０００万。ここに置いてあるのは、前金の１５００万です」
半右衛門の言葉に、梅安は目を光らせた。仕掛の的に山田屋がいないということは……つまり、そういうことなのだろう。梅安は何食わぬ顔で口を開いた。
「ほほぉ、かなりの大玉ですね……で、依頼主は？」
「おおっと、〝起こり〟の事は聞かない約束でしたよ。仮にもこの〝鬼の半右衛門〟が引き受けた仕事です。仕掛ける相手は、〝世のため人のためにはならねぇ奴〟ってことだけは、間違いありません」
「ふむ……〝急ぎ〟ですかい？」
「できれば年内には、片をつけてほしいですな。遅ければ遅いほど、泣かされる人は増える。そういう奴ですよ」
「……」
梅安は少し間を置くと、アタッシュケースの蓋を閉じ、手元に置いた。

「引き受けましょう」

＊

翌朝……

梅安の執務室に、日進が訪ねてきた。
「昨日ね、松坂組の賭場で第８９鎮守府の警護を担当している憲兵をつかまえて、酒を少し振る舞ったら、コロリと吐きましたよ」
「それで？」
「あの嶋田英夫って奴がとんでもない好色野郎ってのは、間違いなさそうですぜ」
「ほう……」
「それともう一つ良いことを聞きました。来月の１日は嶋田の親父さんの命日だそうで……嶋田の奴、その日は必ず芝公園の増元寺に参って供養するそうですよ」
「来月の１日…あと５日か……」
梅安は猪口に入った酒をクイッと呑んだ。
「日進。今度ばかりは肝を据えてやらなきゃいけないな」
「ええ……あっしもこうなった以上、腹括りますよ」
「……しかし、危うかったねぇ……もし俺があの大和の治療を引き受けなかったら、後味の悪い仕事をしていたかもしれねぇな」
「ええ、全くですね……」

＊

そして、その１２月１日が来た。
嶋田英夫中将は、護衛の士官２人を引き連れて、芝公園にある増元寺に向かった。
彼の亡き父、嶋田秀則の供養をするためである。
嶋田英夫は、回忌でなくとも、先祖の祥月命日に提督業務が非番であれば、必ずこの増元寺に赴いて供養を行っていた。
供養を終えた嶋田英夫は、厳しい寒気のためもあって尿意をもよおし、本堂の廻り廊下にある便所へ向かった。勝手知ったる菩提寺であったため、英夫は護衛を連れずに一人で廊下を歩き、便所に入った。

《推奨ＢＧＭ：必殺！》
嶋田英夫は用を足して出てくると、便所の戸口に、僧に変装した輝梅安がいた。
「これはこれは……」
梅安はにこやかに笑いかけつつ、丁重に頭を下げた。
「うむ」
嶋田英夫は、梅安を寺の小僧と思い込んだのか、敬礼で返すと、そのまま立ち去ろうとした。
その刹那―
《ドシュッ！》
「あ……」
梅安はすれ違いざまに、嶋田英夫の延髄に深々と殺し鍼を突き刺した。
嶋田は、わずかに呻いて、棒立ちとなった。
梅安は振り向きもせずに、廊下から消え去った。
それから一時間後、英夫の変死に気づいた増元寺の僧や護衛の士官たちが大騒ぎをしている時、輝梅安は僧衣からいつもの軍服にもどり、何処かへと去っていった……

＊

その頃……
山田屋久兵衛は、山本半右衛門に呼び出され、深川・門前仲町の寺院墓地に来ていた。石川久太郎の隠れ家がある場所である。
この数刻前、久兵衛は半右衛門の遣いから
『今日、後金を頂きたいので、深川・門前仲町の寺院墓地に来て欲しい』
と、言伝を頂いたのだ。
久兵衛は、上機嫌になって会社の部下にタクシーを呼び出させると、後金をギッシリと詰め込んだ鞄を手に、単身で墓地に向かったの

である。
　墓地の入り口には、半右衛門が出迎えていた。
「久兵衛さん、悪いですな。このような所に呼び出して」
「いやいや、かまいませんよ。それより、石川久太郎を仕掛けたのは本当ですか？」
「ええ。何とかね……」
「おお！流石は半右衛門さんだ！良い仕掛人を持っておいでですね！」
「それほどでも……」
「で、奴の死体は？」
　興奮する久兵衛に、半右衛門はある場所を指差した。
「あの古井戸に隠しておきました」
「おお！そうですか！では早速向かいましょう！」
　久兵衛ははやる気持ちを抑えながら、木の蓋で密閉された古井戸に向かった。
　半右衛門も、それについていった。
「ところで久兵衛さん。後金は確かに持ってきてますよね？」
「おお、そうでしたね。はい。約束の後金です」
　久兵衛は上機嫌に後金がギッシリと詰め込まれた鞄を半右衛門に見せた。
　半右衛門がその鞄を手に持った、その瞬間―
《推奨ＢＧＭ：仕掛けて仕損じなし》
《ドスッ！》
「えっ……」
　その瞬間、半右衛門は鞄で手元を隠したまま、懐に隠した匕首で山田屋久兵衛の腹部を突き刺した。
　久兵衛は何が起きたのか全く理解できなかったが、半右衛門は匕首で腹部を深く抉り込ませて、久兵衛の息の根を完全に止めた。
　半右衛門が鞄を持ったまま匕首を抜くと、久兵衛は三歩ほど後ずさってから、そのまま崩れ落ちた。
　すると、木の陰に隠れていた日進が現れた。

「後始末、頼みますよ」
「へい」
日進はそういうと、久兵衛の亡骸を抱えて古井戸まで運ぶと、木の蓋を開けてその亡骸を放り投げた。
半右衛門はその様子を見ながら、吐き捨てるようにいった。
「嘘つきめ！この後金は手前の仕掛料として頂くぜ！」
血を拭った匕首を懐にしまうと、半右衛門は鞄を持って何処かへと去っていった。

＊

この翌日、海軍省広報課は嶋田英夫中将が脳卒中で急死したことを発表した。
それと同日、山田屋久兵衛の捜索願が警視庁に届いたが、未だ発見されていないという……

＊

そして、それから月日は流れ……
《推奨ＢＧＭ：安息〈Ｍ５６〉（必殺仕掛人より）》
「ほほぉ～……俺が留守の間にそのようなことがあったとはね……」
「よく言いますよ……」
大晦日。輝梅安は長谷川源蔵と共に品川にある蕎麦屋〔甚五郎〕で

年越し蕎麦を食べていた。
この時期、長谷川源蔵は４４４番鎮守府の近海で海賊行為を行っていた兇賊〔夜走りの空母水鬼一味〕の討伐の為、１ヶ月以上に渡り４４４番鎮守府方面へ遠征に出ていた。
この兇賊を捕える為、長谷川源蔵は五大剣の一人である蒼⊠竜一郎の協力を得たのだが、それはまた次の機会に話すとしよう。
兎も角も、長谷川源蔵は今回の一件に首を突っ込む余裕が無かったのである。
源蔵がこの一件を聞いたのは、実は今日が始めてであった。
「……で、その石川大佐と大和の件。頼みますよ」
「おう、任せろ。三箇日が過ぎた頃に、永福寺に赴こうと思う」
「今頃は、あの二人も永福寺で晦日蕎麦をやっているでしょう」
「ああ。二人を狙う奴は、もういないのだからな……」
梅安は、残りの汁を啜り、一息つきながら、
（今年も、死ななかったな……）
と、シミジミに感じ取っていた。

原作：池波正太郎「仕掛人・藤枝梅安『梅安晦日蕎麦』」

艦これ仕掛人其の五「歳末大仕掛」
終劇

ひとでなし消します

のさばる悪を、何とする
天の裁きは、待ってはおれぬ
この世の正義も、当てにはならぬ
闇に裁いて、仕置きする
南無阿弥陀仏

（必殺仕置人より）

＊

冬の海風が鼻にくる如月（２月）の頭…
輝梅安（ひかりばいあん）が、陸戦隊時代から懇意にしている外科医・山村源内（やまむらげんない）の自宅を後にしたのは、２１時頃であった。
この数日間、梅安は源内の往診にかかりっきりであった。
それというのも、既に８０を超えた源内老先生が肝臓を悪くしてしまい、
「これはもう、梅安さんのほうがちょうどいい」

というので、若い看護師を第１３鎮守府まで走らせたのである。
これまでに梅安は、いろいろと源内先生に迷惑をかけていた手前、捨ててはおけなかった。
この話を聞いた梅安は、
「よろしい。すぐに向かいましょう」
と、即決したのである。
数日間も通いづめで治療を施したので、源内の容態はたちまち回復した。
実は、この日は源内宅に泊るつもりでいたのだが、新年に入ってまだ一度も逢っていない女将の飛鷹の肌が恋しくなり、
「源内先生、また明日伺います」
と、いいおき、料理屋〔出雲丸〕へ泊るつもりの梅安は源内宅を後にした。
源内宅と出雲丸の間はそう離れてはおらず、歩いておよそ３０分ほどの距離であった。
その道中には大きい交差点があり、長さ１８ｍ、幅３．６ｍの歩道橋があった。
その歩道橋を渡りつつあった輝梅安であったが…
「う…うぅ……」
（む……）
橋の中程で、かすかなうなり声が聞こえた。
梅安は足を止めて身を屈めると、歩道橋を向こうへ駆け去る複数の足音が聞こえた。
（誰か、やられたのではないか……）
コートの内ポケットからスマホを取り出し、ライトを点灯させると、梅安は階段を駆け上った。
人が倒れていた。しかも、まだ生きている。
「おい、大丈夫か？」
片手で抱き起し、ライトで照らすと、４０ぐらいの海軍士官で、顔半面が血で紅く染まっていた。
「斬られたのか？」

「うぅ……」
「待っていろ、すぐ手当てしてやる」
男の傷は、左の鬢から顎にかけて一ヶ所。ここまでなら大したことではないが、背中を深々と突き刺されていた。梅安はその傷口を男のコートで塞ぐと、これを抱き上げて、肩で担いだ。
（この傷の具合ではとても鎮守府まで持つまい。こうなれば、源内先生のところまで運ぶしかねえな）
と、思ったのだ。
ご高齢とはいえ、山村源内は優れた外科医であるということは、梅安がよく知っていた。
「しっかりしろ。もうすぐだ。もうすぐ手当をしてやる」
歩道橋を引き返し、源内宅まであと５００ｍほどといったところか……
巨漢の梅安は、男を担いで息を切らせず駆け戻った。
「源内先生！人が斬られました！すぐに手術（オペ）を！」
梅安は出迎えてくれた看護師に急患をつげると、看護師はすぐさま源内を呼んだ。
「なんと、人が斬られた……」
看護師から話を聞いた源内が跳ね起きてきてくれた。
手術用のベッドにうつ伏せで寝かされた士官の傷口をあらためると、源内はすぐに治療に取り掛かった。
しばらくして……
手術中を知らせるライトが消灯し、手術室からストレッチャーに仰向けで寝かされた士官に続いて、源内が出てきた。
「先生……」
手術室前の椅子で待っていた梅安が源内に問い掛けたが、源内は無言で首を横に振ると、口を開いた。
「一命こそは取り留めたが、いかんせん出血量が酷い。ここの設備では、どうも……」
「……」
梅安は黙ってそれを聞いていた。源内は続けた。

「あの男はな、名を森山久治郎(もりやまひさじろう)といって、海軍警務隊の隊員なのだよ」
「警務隊の……？」
「そうじゃ。土地(ところ)では評判のいい男でな…〝有明の親分〟と呼ばれるくらい慕われておったくらいじゃ」
「……」
　その時、久次郎を運んだ看護師が慌てた様子で駆け込んできた。
「せ、先生！久次郎さんの容体が急変しました！」
「な、なんじゃと!?すぐに向かう！それと鎮静剤の用意を！」
「は、はい！」
《推奨ＢＧＭ：哀の色で染めて（必殺仕事人Ｖより）》
　病室では、久次郎が凄まじいうなり声を上げていた。
「久次郎！これ！わしじゃ！山村源内じゃ！わかるか！」
　源内の呼びかけに、久次郎がわずかに目を開けて、
「あっ……げ、源内先生……」
「おおっ！久次郎、わかったか！これ、じっとしておれ！じっと……」
「せん……せ……ぐうぅっ！」
　たちまち、久次郎の呼吸がせわしくなり、源内の襟元を掴んで半身を起こそうとするのを、梅安が抱き支えてやった。最早手当どころではない。久次郎は最後の炎をこの瞬間(ひととき)に燃やし尽くそうとしている。
「これ、久次郎！何か言い遺すことは……」
「……ぁ、あどう」
「あどう？」
「あどう……悔しい……ちきしょう……あ……」
　いいさして、遂に言い切れず、海軍警務隊隊員・森山久次郎は山村源内の腕の中で、がっくりと息絶えてしまった……

＊

　海軍警務隊隊員・森山久次郎は、第７鎮守府の敷地内にある官舎に

住んでいる。
３ＬＤＫの住まいに、久次郎は女房である艦娘浜風と、５歳になるひとり息子の平吉と仲良く暮らしていた。
久次郎は元々、海軍特別警察隊第４７方面隊の隊員であったが、とある事件に深入りしすぎてしまい免職の危機にあったところを長谷川源蔵の目に留まり、警務隊にスカウトされた。
その際教育係を務めたのが、浜風であった。
まじめで正義感の厚い久次郎の人柄に、浜風はいつしか惹かれていき、ついには源蔵の仲立で夫婦（めおと）となり、息子の平吉を設けたのだ。
「わしが知り合ったのは、３年前にとある事件に巻き込まれたとき、悪漢に襲われかけたのを久次郎に助けてもらってな……それ以来親しくなったのじゃ」
源内は久次郎の死顔を見守りながら、そうしみじみと語った。
久次郎の死体には、今夜うけた刀痕のみではなく、肩や腕に、いくつかの傷跡がきざまれていた。
看護師が、久次郎の死体を浄（きよ）めるにつれ、その死顔もおだやかな顔に変わっていった。
山村源内同様、これまでに軍医として、幾人もの死顔を見てきている輝梅安である。
ヒトという生き物は、どのようなクズでも、どんなに無様な死に様を晒しても、息絶えてその後、死の静謐（せいひつ）に導かれると、やがて例外なくおだやかな死顔になっていく。
（俺が仕掛人としてこの手にかけた奴も……また、いずれは俺も、無様な死に様を晒すことになるだろう。この俺も、死ぬときはこのような〝いい顔〟になるのだろうか……）
梅安はいつも、そのことを考えている。
仕掛けたときは、相手の死顔がおだやかになるのを見てはいけない。すぐに逃げねばならぬからだ。
「時に源内先生。このことを家に知らせなくては……」
「うむ、そうじゃな。明日の朝というわけにもいくまいし……」
「よろしい、私が知らせましょう。警務隊の長谷川様とは親交もあり

ますので…」
「あ、お待ちなさい」
「なんですか？」
「梅安さんも、さきほど久次郎が言い遺した言葉を聞きましたな」
「はい」
「そのことに、儂らはあまり立ち入らぬ方がよいと思ったのじゃが……どうじゃ？」
久次郎は
「あどう……悔しい……ちきしょう……」
と、言い遺した。その中ではっきりとわからないのが〝あどう〟の3文字である。前後の様子からおして、これは人の苗字と看てよいのではないか……
さらに、久次郎は海軍警務隊の人間。ともすれば、この〝あどう〟という姓の人間は
（海軍の士官…）
と、梅安は思っている。
ともすれば、久次郎の稼業柄、その〝あどう〟某は、何かの犯罪に手を染めているのではなかろうか……
それは、山村源内も察しているに違いなかった。
「わかりました」
梅安はすぐに頷いた。
「立ち入らぬほうがよろしいでしょう」
「わしは、あまり面倒ごとに巻き込まれるのが嫌いでな。毎日の仕事だけで手一杯なんじゃよ」
「ごもっともです」
「では、久次郎からは何も聞かなかったことにしましょう」
と、源内は看護師に
「山田、わかったな」
念を入れた。
「では先生。行ってまいります。いや、私がまいります」
「そうですか、わかりました」

梅安は、治療箱を持って、外へ出た。
もしも輝梅安が、海軍警務隊隊員・森山久次郎の人柄とその暮しぶりの一端を聞かなかったら、源内の言う通りにしていたであろう。
他人事ではない。梅安自身も場合によっては、久次郎の縄にかかる事もなかったとは言えないではないか……
もっとも、山村源内は梅安の〝裏〟の稼業を全く知らない。ただもう、優れた軍医として、梅安を高く買っているのだ。
再び、あの歩道橋を渡りながら、梅安はあの息絶えんとするときの久次郎の無念そうな形相を思い浮かべていた。
（あれだけの警務隊員が、あれほど悔しそうにして死んだんだ。久次郎を殺した奴は、よっぽどの悪党にちげえねえ……）
と、思う。
いずれにしても、梅安は久次郎の女房の顔を見て、その態度を確かめたうえで久次郎の遺言を伝えるつもりであった。
（そのうえで、俺のやることは決まる……）
のである。
歩道橋を渡りきり、真っ暗な通りを進んでいる途中、
（む……）
梅安は、背後に微かながら人の気配を感じ取った。
感じ取ったが、梅安は構わず歩を進めた。
そして……
通りを抜けた先の住宅街を過ぎたとき、それまで梅安を尾行していた人の気配が消えた。
梅安は少しも歩調を変えず道を進み、途中でタクシーを拾って第7鎮守府に向かうと、まず敷地内に建てられた源蔵の役宅に向かって事情を説明すると、そのまま源蔵とともに官舎にある久次郎の部屋に赴き、玄関で出迎えてくれた妻浜風に彼の死を告げた。

＊

翌朝、小鳥の囀りとともに輝梅安は目を覚ました。
隣には、飛鷹が静かに寝息を立てて添い寝をしており、彼女の甘いぬくもりが寝具を包み込んでいた。
昨夜あれから、梅安は第１３鎮守府には戻らず、小料理屋〔出雲丸〕の戸を叩き、いつもの２階の自宅スペースで泊った。
警務隊員・森山久次郎の家に着いて彼の死を告げた時、女房浜風は気丈に
「……稼業が稼業です。いずれは…こんな時がくるかもしれないと、覚悟はできていました。あなたのおかげで山村先生に夫の死水をとっていただけました。あの人も……さぞ満足しているでしょう。本当にありがとうございました」
丁寧に、礼を述べた。
「なにか、あの人が言い遺した言葉はありませんか？」
「……」
この時、梅安は例の〝あどう〟のことを打ち明けようと思ったが、必死に耐えている浜風は、これから息子の平吉と共に源内宅へ駆けつけ、夫の亡骸と対面しなくてはならないのだ。
それをおもうと、
（なにも、いまでなくともよい）
梅安は思いなおし
「いや、手当したのは源内先生なので、先生に聞くのがよろしいでしょう」
「そうですか……」
浜風は頷きながらも、梅安を喰い入るように見つめた。
知らせを聞いて、近くに住んでいた第十七駆逐隊の面々が駆けつけてきた。浜風の姉である浦風も真青になってあらわれた。
これだけ人手がいれば、なにも自分が源蔵とともに浜風に付き添って行かなくてもよいと考えた梅安は、第７鎮守府の正門まで浜風・平吉母子と同行し、そこで別れた。
「いずれ、改めてご挨拶に……」

浜風は涙も浮かべずにいった。
（今頃、あの親子はどうしているのだろう……）
出雲丸の天井を見上げながら、昨夜、冬の道を泣きじゃくりながら、十七駆の艦娘に支えられて歩いていった平吉の後姿を、梅安は思い浮かべていた。
すると、それまで可愛い寝息をたてて寝ていた飛鷹が目を覚ました。
「んん……あ、梅安先生。おはようございます」
「ああ、おはよう」
飛鷹ははだけた寝間着と乱れた髪を整えながら起き上がった。
「すぐに朝ご飯と……あの、お風呂の支度を……」
少し恥じらうように飛鷹は部屋を出たが、その声にははずみがあった。今年に入って初めて出雲丸を訪ねた梅安を、飛鷹は初めてみたのである。
飛鷹が部屋を出ると、梅安は部屋の隅に置いていたスマホを手に取って電源を入れると、留守電が入っていた。
電話主は、日進だった。
（げ……）
大抵、日進からの電話は言わずもがな
「仕事」
の案件である。
（正直、それどころじゃねぇんだよなぁ…）
今の梅安は、仕事をする気にはなれなかった。
どうにも、あの久次郎の死が気になって仕方なかったのもあるが、
（どうにも、気にかかる…）
ことがあった。
あの時、山村源内宅から第7鎮守府に向う途中、歩道橋を渡ったあたりから住宅街の近くまで、
（たしかに、俺の後をつけてきた奴がいる。とすれば、久次郎を殺した奴が、俺が久次郎を源内先生のところへ担ぎ込むのを見届けていたことになる……）

このことであった。
ゆえに、輝梅安は第７鎮守府からこの出雲丸まで行くとき、細心の注意を払った。
だから
（つきとめられては、いないはずだ）
その自信はある。
もっとも、
（出雲丸から鎮守府までの帰りも、充分に気をつけねぇとな…）
梅安は、寝間着から普段の軍服に着替えながら、そう感じていた。

＊

出雲丸で朝食と朝風呂を済ませた輝梅安が第１３鎮守府に戻ったのは、１２時を少し過ぎた頃であった。
この時も梅安は、細心の注意を払って鎮守府まで帰ってきた。
２日も鎮守府を留守にしていたので、業務がたまり込んでいたのである。
「あ、提督。どこにいっていたんですか？」
留守を頼んでいた秘書艦の翔鶴が、
「そんなにお医者様がよろしいのでしたら、軍を辞めて開業医になればいいのに」
と、いった。
どうもこの頃、第１３鎮守府の艦娘たちの態度が馴れ馴れしくなってきて、遠慮介釈もない口をきく。
「実は今朝方、元帥府から通達がありまして……」
「元帥府から？どのような内容だ？」
「はい。本日１７００時頃に八雲元帥がこちらに来訪するとのことです。詳細は、これに……」
「ふむ……」

梅安は翔鶴から書類を受け取った。
文面は、つぎのごとくであった。

本日１７００時ニテ、帝国海軍七元帥ガヒトリ、八雲紫元帥ガオ忍ビデ第１３鎮守府ニ訪問スル。クレグレモ粗相ノナイヨウニスルコト。

梅安は書類を折り畳むと、懐にしまった。
（日進のメールに八雲元帥の来訪……少々タイミングが良すぎるな……）
八雲紫……帝国海軍元帥府を統括する海軍七元帥に名を連ねるこの女性は、海軍大臣松平定助の後見人であり、その絶大な影響力から、〔海軍のゴッドマザー〕と呼ばれているが、それは表向きのことで、裏へまわれば、仕掛人と同じく、晴らせぬ恨みを晴らす裏稼業の一派である〔仕置人〕の総元締であると同時に、仕掛人の蔓の一人である。
梅安はかつて、仕置人を始めとした裏稼業のものたちと共に〝世紀の大仕事〟を手掛けたことがあるのは、以前にも触れたが、梅安はこれ以前にも、紫から〝仕掛〟を頼まれたことがある。
その時、彼女と渡りをつけてくれた東間吉兵衛いわく、
「先生。他からの仕掛の頼みには、私もあまりいい気持ちはしませんが、八雲の姐さんならば、おうけなすっても大丈夫でございますよ。あのお人は、仕掛のことについちゃあ、それはもう念を入れなさるお人でございます。よくよく納得がいかねぇ限り、仕掛は引き受けません。ですからね、あのお人が持ってきた仕掛は私同様、間違いなく〝この世に生かしておいては世のため人のためにならねぇ奴〟への仕掛でございます」
とのことである。
その心情は仕置人の総元締となった今でも変わってはおらず、以前仕置人と共に手掛けた仕事で仕掛けた的も

「この世の屑みたいな奴」
だった。
その八雲紫が第13鎮守府に来る……梅安は直感で
（間違いなく、〝仕事〟だろう）
と、悟った。
（正直会いたくねぇが…この〝世界〟にはぬきさしならぬ〝義理〟というものがある…それに、公務である以上、会わぬわけにはいくまい）
梅安は思いなおし、
「翔鶴、昼は軽めのものを頼む。すぐに業務に取り掛かろう」
と、いった。

＊

その、17時がきた。
第13鎮守府の正門前に停車した車から、枯れた和装の男性を連れた長い金髪の女性が現れると、整った軍装に着替えた梅安が出迎えた。
「これはこれは輝大佐。お初にお目にかかりますわ」
女性……八雲紫が、丁寧にあいさつをのべた。
裏の世界では何度も顔を合わせた二人であるが、公務の上では、これが初対面であった。
「ようこそ第13鎮守府へ。八雲元帥」
梅安もまた、儀礼的にあいさつをのべた。そして……
「それに……山本前司令」
「どうも。ご無沙汰しております」
紫の隣にいた男性……山本半右衛門とも、挨拶を交わした。
「さあ、いつまでも外にいてはお寒いでしょう。執務室までご案内します」
「では、お言葉に甘えまして……」

梅安は二人を執務室まで案内した。
「翔鶴。すまないが鳳翔さんに執務室まで酒を持ってくるよう伝えてきてくれないか。熱いのでな」
梅安は翔鶴にそういうと、翔鶴はその場を後にし、梅安は辺りを確認してから、執務室の扉を閉めた。
執務室には、半右衛門と梅安、そして紫の三人しかいない。
梅安は二人と向かい合うように座った。
「で、御用のおもむきは？」
物やわらかい口調で梅安が問うと、半右衛門が無言で懐から〝何か〟を取り出そうとするが、梅安は手を指して止めた。
「仕掛の話なら、今はちょいと」
「いけませんか？」
「はい」
「それは、少し困ったわね…」
紫の眉間に、少しばかりシワが寄った。
「梅安先生をたのみにして、半右衛門さんにつなぎをたのんでここまで来たのだけど…」
「それが急に、取り込みごとができてしまいましてね…」
「はぁ……」
「先のことでは、いけませんか？」
「それがですね梅安さん。私もつなぎを頼まれた際に紫さんから話を聞いたのだが、この相手を一日も生かしていると、その分世の中が迷惑するというのでな。だからこうして、私も紫さんと一緒に、この仕掛を頼みに来た次第でして……」
半右衛門がいいさしたとき、鳳翔が酒を持ってあらわれた。
それに続いて、間宮が土鍋を持ってあらわれ、火鉢にかけた。
昆布を敷いた湯の中へ、厚めに切った大根が、もう煮えかかっていた。
これを小皿にとり、醤油（しょうゆ）をたらして食べる。
なんの手数もかけぬものだが、大根がよろしければ、こうして食べるのが梅安は大好物であった。

「さ、つまらないものですが…」
梅安が小皿にとった大根をすすめると、
「まぁ……」
少し紫が目をみはって、
「では、いただきますわ」
ひとくち、大根を食べ、
「答えられない味ですわ」
と、いった。
それに続いて、半右衛門も大根を口にし、
「ふむ…なるほど、確かにおいしゅうございますな」
と、いった。
梅安は鳳翔と間宮に
「後片付けは私がやるから、お前達は下がっていいぞ」
と、いった。
「もう一つよろしいかしら?」
「どうぞどうぞ。お気に入ったのでしたら、いくらでもあがって下さい」
ふうふういいながら、3人は、しばらくの間、大根を食べ、酒を呑んだ。
「すっかり、あたたまってしまいましたわ。先生」
「それは結構。それにしても、こんなお寒い中を、わざわざお運びいただいたのに、ご両所のお役に立てず申し訳ありません」
「いえいえ……どうしても、お引き受けいただけないのでしたら、これはもう、あきらめるしかありませんわね」
「ま、ひとつ……」
「はい、はい。大変によいお酒ですこと。あ、これはどうも、恐れいりますわ」
「あ、これはいけない。いま、酒のおかわりを……」
銚子(ちょうし)をとって梅安が備付の厨房へ立ち、酒の支度にかかっていると、突如、執務室から半右衛門の声が聞こえた。
「梅安さん……こいつぁ、独り言なんで、お耳に入れなくても結構でご

ざいますよ」
梅安は、苦笑をもらした。
「その野郎どもは、まことにもってふてえ野郎どもで！」
と、半右衛門の口調が、がらりと変わった。怒りと憎悪が、まぎれもなく、その声にこもっている。
「海軍軍令部次長をいいことに、おのが手にかけずとも何人も殺してきやがったことか！野郎どものせいでこれまでに幾人もの人が泣き寝入りしてきたにちげえねえ！そのクズ野郎どもの名は、阿藤銀次と健之助といいましてね――――――……」
厨房から出てきた梅安の顔色が、あきらかに変わっていた。
「へへ…こいつぁ、とんだ独り言をいってしまいました。申し訳ありません」
半右衛門と紫は、うつ向いて大根を食べている。
「ご両所方……」
「はい……？」
「その仕掛の返事……3日ほど待ってはくれませんか？」
「え……？」
まじまじと梅安を見つめた紫が
「では、お引き受けを……」
「いや、決めた訳ではございません。だから、3日待ってもらいたいと申しているのです」
「はい、はい」
それから間もなく、山本半右衛門と八雲紫は帰っていった。
鎮守府正門まで送って出た輝梅安を、紫は両手を合わせて拝むかたちになり、つぶやくがごとく、こういった。
「世のため、人のため…半右衛門さんの独り言の効き目がありますように……」
これに梅安は、にこりともしなかった……

＊

第１３鎮守府を後にした八雲紫は、音羽屋で半右衛門と別れ、ひとり冬の道を歩いていた。
「藍」
「ここに」
紫の背後に、狐の耳を生やした女性が姿を現した。
彼女の式である藍だ。
「輝大佐から目を離さないでちょうだい。悪い予感がするわ」
「承知いたしました」
「私はこれから〔上様〕のお屋敷に行くから、くれぐれも頼むわね」
「心得ました」
藍はそういうと、姿を消した。
紫は振り向かず、そのまま歩き続けた……

＊

翌日……
海軍警務隊長官・長谷川源蔵が、柄樽の清酒を携えて、第１３鎮守府を訪れた。
「源蔵さん。なんですかこれは？」
「いやなに、いつもお前には世話になっているからな。これは、ほんのお礼といったところだ」
「お礼、ねぇ……」
梅安は苦笑して、その柄樽を見た。
「……で、今日はどんな用で？わざわざこの柄樽を届けに来ただけ、というわけではないでしょう？」
「へっ、相変わらず鋭い野郎だこと……」
源蔵は柄樽をテーブルの脇に置くと、そのままソファに腰掛けた。

「実は、久次郎のことでな……」
「久次郎の？」
「そうだ。お前と別れた後、俺は浜風と平吉坊、そして17駆の面々とともに山村源内宅に安置されていた久次郎の亡骸を引き取ったのだが…浜風はその時、源内先生に何かいい遺したことはないかと、しきりに問いかけてきたのだが、源内先生は何も知らぬの一点張りでな。その源内先生曰く、お前さんが担ぎこんだときには、もう息絶えていたとな……そしたら今度は、お前さんの住所を訪ねてきた。先生は知らぬと言い張ったが……俺はひと目で、先生が何か隠していると睨んだ。それもなにかやべえことをだ。あの久次郎が、遺言の一つや二つをいい遺さずにくたばるようなタマじゃねえこたぁ、俺も浜風も知っている。だからなにかいい遺したにちげえねえ……とまぁ、そこで俺が浜風に代わって、お前さんとこにきたわけだが……どうだい。何か思い当たる節があるんじゃねえのかい？」
　源蔵は態度を変えずに問い詰めた。ここまで直感で動くと、さしもの梅安も白旗を掲げざるを得ない。
　梅安は猪口を置いて、口を開いた。
「……まったく、相も変わらず勘の鋭いお方ですな。貴方は。元締や〔闇の大本営〕が敵に回したくない理由（わけ）が頷けますよ」
「では、やはり久次郎は何かいい遺したのか？」
「ええ……もっとも、源内先生には、全く知らぬことなんですが……」
「何と申した？」
「あどう、と、ね」
「あどう……？」
「それだけです。本当にそれだけいって事切れたのです」
「ふむ……」
「俺が思うに、こいつぁ人の苗字……それも海軍の人間だと考えているのです」
「人の苗字……それも海軍内部の人間か」
　源蔵は腕を組んで思案すると、ポンッと膝を叩き、
「よし、その〝あどう〟については、俺が浜風に何か心当たりがあるか

調べてみよう。いやすまねえな。このようなことを聞くためにわざわざ来てしまって」
と、いった。
梅安は笑顔で、
「いえいえ、いつも警務隊にはお世話になってますから……」
と、いった。

＊

それから、数刻後……
梅安は再び、山村源内宅へ往診に来ていた。
「源内先生。昨日は往診に来られず申し訳ありません」
梅安は鍼を打ちながら源内に謝罪すると、
「いやいや、こんな寒い中、こうして来てくださっただけでもありがたいものだ」
と、穏やかに返した。
「それに儂も昨日は…浜風と平吉坊の姿を思い出して気が滅入っておったのでな……」
梅安はその時の様子を源蔵から聞いていたのだが、その時、久次郎の亡骸を前に、平吉坊は涙が枯れるまで泣きわめいたそうな……
梅安は少し暗い顔をしたが、すぐに思い直し
「源内先生。肝臓も悪いことですし、この寒い中は往診はせぬ方が良いでしょう」
「なぬ？」
「しばらくはこの家から出ない方がよろしいでしょう」
「それは何ゆえ……」
「そうなさい」
やがて……
輝梅安は、山村源内宅を辞した。

いつものように、第１３鎮守府への帰路についていた梅安だったが、あえて帰り道に海沿いの道を歩いていた。
この道で鎮守府に帰るには、道中に敷かれた橋を渡らなばならなかった。
空には、月も星もない。
凍てつくような暗夜であった。
橋の中ほどまで歩いたとき、梅安の背後を歩いていた黒い影が白い刃を引き抜き、梅安に迫った。
「きやがったな！」
怒鳴りつけざまに振り向いた梅安が隠し持っていた石を曲者に投げつけておいて、
「とぁっ！」
一気につめよって相手の鳩尾に正拳突きを討ち込んだ。
「ぐぁっ！」
梅安の思いもよらぬ反撃によって、曲者はその場に倒れ込んだ。
「ざまあ見やがれ」
梅安はつめよった際に、相手が海軍士官だというのをひと目で確かめた。
そして、面（つら）を拝もうとした、そのときであった。
「むっ!?」
橋の両側から数人の足音が、梅安に迫ってきた。
これにはさしもの輝梅安も予想していなかった。
梅安は倒れた士官の軍刀を拾いあげ、ぱっと飛び退（ずさ）って、橋の欄干を背に、
「てめえら、何者（なにもん）だぁ！」
と、叫んだ。
迫りくる刃は五つ。
数多くの修羅場を潜り抜けた輝梅安も、息が詰まった……

＊

その夜更け……
第４２番鎮守府近郊の街に、「日向」なる居酒屋がある。
土地(ところ)では評判の良い店で、この店を切り盛りしている女将は、その名の通り、退役艦娘の日向であった。

この日向。かつては裏の世界でその名を轟かせた〔渡し人〕であり、表の世界では〝４４４番鎮守府三強〟として《羅利(らせつ)の鳳翔》、《覇王間宮》と並び称され、内外から恐れられた伝説の艦娘、〝修羅の日向〟その人である。
現在は裏の世界から足を洗うと同時に海軍を退役、この居酒屋「日向」の女将として、堅気の生活を過ごしていた。

日向はその時、店の暖簾を下げて、店じまい後の後片付けをしていたが、
「もし……もし……開けてくれ」
ふと、店の戸を叩いて呼ぶ声に気付いた。
「すまないがもう店じまいなんだ。悪いけど他をあたってくれ」
日向は断りの文句をいれたが、それでも戸を叩く音はやまない。
「どなたです？」
日向は懐に匕首(あいくち)を忍ばせながらたずねた。
「俺だよ。おい……」
声が、ふるえている。
「俺だけではわからないね。名前をいって下さいな」
「何を迷言(よまいごと)をいってるんですか日向さん。梅安ですよ、輝梅安(ひかりばいあん)……」
「なに……」
日向が戸を開けると、ずぶ濡れの輝梅安が大きな躰を小刻みに震わしながら立っていた。

「な、何があったんだ梅安。こんな寒い中そんなびしょ濡れで……」
かつての旧友の、思いもよらぬ訪問に驚く日向を前に、梅安はよろよろと店の中に入ると、ぐったりと膝をついた。
「ち、鎮守府への帰りで……大勢の刺客に襲われてね……とっさに海に飛び込んだら……気が付くとこの店の近くにいてね……」
「待ってくれ。詳しいことは後で聞くから、はやくその躰を温めないと……」
日向は真新しいタオルを何枚も出して梅安に渡し、消したばかりの石油ストーブを着火し、茶を湯のみにくんで、
「さ、これを……」
「す、すまねぇ……」
「さ、はやくストーブの前に……」
「む……」
１８０ｃｍ以上はある梅安の裸体を、日向はタオルを替えながらゴシゴシと擦りつけた。
青ざめていた梅安の顔色が少しずつよくなってくるのを見て、日向は着替えを出して、梅安の背中へ着せつけた。
「むぅ……どうやら、生き返ったようだよ。日向さん」
「先程の声は、お前のものとは思えなかったぞ…」
「音羽屋に駆け込もうと思っていたんですが、ここからだと遠いんでね……日向さんを信頼して、ここに駆け込んできた次第で……」
「そうか……」
しばらくして……
輝梅安は日向が持ってきた冬用のシュラフへもぐり込み、枕もとに座った日向と卵酒をのみながら、ここまでの経緯を話した。
「……では、その久次郎を殺した者たちが梅安を?」
「おそらく…奴らは俺が久次郎を背負って山村源内先生の家へ運び込むのを見届けて、久次郎が死の間際に何やら秘密を洩らしたのではないかと思い、俺を狙ったんでしょう」
「ということは、その源内先生と久次郎の家族も危ないのではないか?」

「ええ…源内先生には家から出ないよう言ってあります。あとは、源蔵さんに頼んである…久次郎がいい遺した〝あどう〟について、早々に尋ねねえといけませんが……」
「梅安。これはやはり音羽の元締と八雲の元締に頼まれたって仕掛の的…阿藤銀次と健之助の親子と関わりがあるのではないか？」
「それはわかりません。わからないからこそ、聞いてくるのです」
「……関わりがあるとしても、その仕掛は断った方がいい」
「……」
「ご両所はお前が久次郎殺しに関わっているのを知らないから頼んだのだろうが……その刺客が阿藤なる親子と関わっていれば、目をつけられているお前が仕掛をするのは容易なことではないぞ。それに……」
日向がいいさしたとき、梅安は茶わんを差し出してきた。
日向は黙って酒をついだ。
「……日向さん。俺は怒ってるんですよ」
梅安は静かな声で呟いたが、その顔は凄まじい面相（ぎょうそう）となっていた。
「奴らが仕掛の的と関係があろうがなかろうが、俺が元締から仕掛を頼まれたことは知らねえ。〝久次郎を助けた〟ただそれだけで俺の首を狙っていやがる。おちおち人助けもできやしねえ……悪（わり）い世の中になったもんだ」
梅安の気迫に流石の日向も無言になったが、溜め息をついて、
「……で、今夜はどうするんだい？」
と、いった。
「ここで寝かせてもらいますよ。ここで急いでもはじまりませんからね」
「店の中で寝るのかい？」
「そうさせてもらいますよ」
梅安はそういうとシュラフへ横たわり、日向もまた、２階の自宅スペースへあがっていった。

＊

その翌朝……

梅安は朝食を日向の家で済ませると、すぐさまタクシーで第７鎮守府近くの軍鶏鍋屋「五鉄」へ向かった。

五鉄へ着いたのは、昼前の１１時頃であった。

梅安は、五鉄の近くでタクシーから降り、裏口へまわると、

「もし、店主に伝えてくれ。輝梅安なる海軍士官が来たと、な」

厨房で働いている女中へ声をかけた。

現在の梅安は、どう見ても海軍士官ではない。

坊主頭の、迫力がありすぎる風貌とは似ても似つかぬ風体をしている。

だれの目にも、帽子をとった梅安は、

（怪しい……）

と、映るに違いない。

それなのに、若い女中は梅安を見るや、すぐさま、

「はい、はい。中に入ってお待ちくださいまし」

親切な物腰で梅安を厨房へ請（しょう）じ入れ、すぐに奥へ入っていった。

しばらくして……

「おお梅安さん。無事だったか」

店主の仁左衛門が厨房に現れ、

「さ、あがってくれ。長谷川様ももうすぐ来なさるから、ささ……」

梅安の異様な風体にはすこしも関心を示さず、２階の奥座敷へ案内した。

１１時半を過ぎた頃に、長谷川源蔵がやってきた。

「おお、無事であったか」

「〝無事〟、というと？」

「いやな、実は昨日のことで、色々と俺なりに調べたことをお前の耳に入れておこうと思って、昨夜電話をしたんだが、まだ帰ってきていないと言われてな……これは何か、お前の身に良からぬことが起きたの

ではないかと思い、伊三次にお前の行方を探らせていたのだ」
「なるほど……こいつぁ、ご迷惑をおかけしました」
梅安は、深々と謝罪した。
「気にするな。いやとにかく無事でなによりだ……で、何があった？」
「ええ、実は……」
梅安は昨夜の出来事を包み隠さず話した。
源蔵はそれを真剣な顔つきで聞いた。
梅安が全てを話し終えると、源蔵は腕を組み、
「そうか……やはり差し向けてきたか」
と、いった。
「やはり、というと？」
「梅安。お前さんを襲った連中は、恐らく阿藤少将の息がかかった奴らかもしれん」
「なんですって……」
源蔵の思いもよらぬ発言に、梅安は目を見開いた。
「うむ。実はな……」
源蔵は昨夜のことを語り始めた……

＊

昨日、第７鎮守府……
長谷川源蔵は第１３鎮守府から戻ってくると、すぐさま自身の執務室に浜風を出頭させた。
「浜風、亭主が亡くなってまだ間もないお前にこのことを聞くのは酷だとは思うが、どうしても聞きたいことがあってな」
「どのようなことでしょう？」
「うむ……実は先程、先夜のお礼に第１３鎮守府を訪ねたのだが…」
源蔵は梅安との会話のことを浜風に話した。
「……あどう、ですか？」

「そうだ。それだけいって事切れたそうだ。どうだ浜風、なにか思い当たることはないか？」
「あどう……あどう……」
　呟きながら、微かに口を開け、むしろ茫然とした顔つきで空間の一点を見つめていた浜風が、何を思い出したのか、
「あ……」
　はっと顔色を変え、
「あどう、ぎんじ……」
　と、いった。
「存じているのか？」
「いえ、その名を主人から前に一度だけ聞いたことがございます」
「よし、そのことを詳しく申せ」
「わかりました」

　それは半月前のことであった。
　夜遅く帰ってきた久次郎に、浜風は酒の支度をした。
　この頃の久次郎は、妙に気を塞いだような、重苦しい顔つきをしていて、家族と口を聞かぬことが多かったらしい。
　普段は無口の久次郎だが、家で酒をのむと上機嫌になり、家族を相手に、しきりに軽口をたたく。
　それが、その時期は酒をのんでも、愛しいひとり息子の平吉が笑いかけても、却って押し黙ってしまい、まるで酒をのむこと自体が苦痛であるかのようなのみ方をしていたのだ。
　しかも時同じくして、久次郎が子飼にしている密偵も、めったに顔を見せず、そのくせ久次郎は毎日のように出かけ、よく遅くに帰って来ていた。
　さすがに心配に思った浜風が、難しい事件でもおっているのかと尋ねたところ、久次郎は素っ気なく頷いた。
　浜風は自分も手伝うといったが、久次郎は俺ひとりでやった方がいいと、それを拒んだという。

その後、浜風が台所で酒を片付けていると、
「畜生、あどう、ぎんじめ……」
と、久次郎が悔しがるように呟いたのを耳にしたという……

「……以上が、私が夫から聞いた経緯です」
浜風がすべて語り終えると、源蔵は腕を組んでしばらく思案してから、
「……よし、わかった。すまんな、辛いことを思い出させて」
「いえ……私も海軍警務隊の隊員。長谷川様の命に従うのが、警務隊員の務めです」
「誰か送り人をつけようか？」
「いえ、大丈夫です」
浜風は気丈に、その場を後にした。
それを見届けた源蔵は、執務室の本棚から一冊の書類を取り出した。
それは、主だった海軍高官の人事に関する書類であった。
その中の軍令部の項目に
《阿藤銀次海軍少将》
の名が載っていた。
海軍全体の作戦指揮を担当する海軍軍令部の№2で、その権力は海軍大臣やほかの閣僚ですら一目置かねばならなかった。
「むぅ……」
源蔵は書類を戻すと、静かに唸った。

＊

「…とまぁ、こういうことだ」
源蔵が語り終えたとき、梅安の顔は凄く真剣なものになっていた。

「……で、他にわかったことは？」
「いや、それだけしかまだわかってはおらん。ただ、久次郎の死とお前を襲った連中の背後には阿藤少将が関係しているのはまず間違いないと見ていい。俺としても、この一件は警務隊の面子がかかっているからな。そっちも、何かわかったらすぐに俺に伝えてくれ」
「わかりました」
梅安はそういうと、源蔵とともに軍鶏のもつ鍋を食べ始めた……

＊

その翌日……
輝梅安は、音羽屋の奥座敷で二人の人物と対面していた。
ひとりは、この音羽屋の亭主である山本半右衛門。
もうひとりは、海軍七元帥がひとり、八雲紫。
丁度この日は、二人が梅安に阿藤親子の仕掛を依頼した日から数えて三日目にあたり、その返事を伝えるために、この音羽屋に来たのである。
「どうやら、先夜の件をお引き受け下さるようお見受けいたしましたが？」
「さよう。ですがその前に、ご両所と肚（はら）を割ってお話ししたいことがありまして…」
「肚を割って……とは？」
「そうでないと、此度の仕掛がやりにくいことになります」
「なるほど、そういった事と次第ならば、こちらも肚を割りましょう」
「ありがとうございます。実は……」
梅安は、先夜以来の経緯を洗いざらい、二人に話した。
聞いているうちに、二人の顔から笑みが消え、躰が小刻みに震えはじめた。貧乏ぶるいを始めたのである。
これは、二人の昂奮をあらわしていた。

梅安が語り終えると、二人の貧乏ぶるいもぴたりとやんだ。
「……そうですか。梅安先生が助けた警務隊員が阿藤親子に……」
紫は静かに呟いたが、その呟きには、あきらかに怒りの感情が芽生えていた。
すると、今度は半右衛門が鋭く目を光らせて、
「……やはり、阿藤銀次とせがれの健之助は、一刻も早く始末しなければいけませんな」
と、いった。
「久次郎の妻子に関しては源蔵さんに任せております。故に八雲の元締には、源内先生の身辺を護ってほしいのです」
「……わかりました。〝とっておきのガードマン〟を揃えて、山村源内先生をお護りいたしますわ」
「助かります」
梅安は紫に一礼した。
すると、半右衛門はアタッシュケースの蓋を開き、中身が見えるように、梅安の手前に置いた。
ケースの中には、1万円札の束がギッシリと詰め込まれていた。
梅安は中身を確認したうえで蓋を閉めて、ケースを脇に置いた。
「ところで、仕置人の方は都合のつく奴がいるんですかい？段取りが決まっても誰もこないってのは勘弁ですよ」
「その点はご心配なく。予定がつきそうな仕置人が四人くらいいるわ。最も、うち二人は貴方も知っている人物よ」
「あとの二人は？」
「新顔よ。腕は確かだから、段取りが決まり次第、藍が貴方へ伝えに来るから、彼女の指示に従ってちょうだい」
「わかりました」
それから間もなく、紫と梅安は音羽屋を後にした。
もっとも、二人の行き先は、それぞれに違う。
梅安は第13鎮守府へ帰り、紫はスキマで何処かへと向かった……

＊

やがて……

八雲紫の姿を、幻想郷の人里にある鍋屋〔角松〕の二階座敷に見出すことができる。

ここは、紫のなじみの店であった。

音羽屋を後にした紫は、藍を使いに走らせていた。

その呼び出した相手が《角松》に現れたのは、紫がついてまもなくのことである。

その相手は、おせいといって、４０くらいの舞踊の師匠だが、その裏の顔は、

「知る人ぞ知る…」

仕置人の一人である。

「紫さん。〝仕事〟のお話でしょうか？」

入ってくるなり、おせいがいった。

紫は、だまって財布を出し、一万円札の十枚束を懐紙の上に並べた。

「今度の仕事料は、十万ですか」

「そうよ。でもねおせいさん。この仕事は少し訳ありなのよ」

「訳あり、とは？」

「実はね…」

紫は、梅安から聞いたことと半右衛門の話を、包み隠さずおせいに語った。

「なるほど……はい……はい……」

湯のみのお茶を啜りながら、おせいは何度もうなずいていたが、そのうちに、湯のみを静かに置いて、

「わかりました。お引き受けいたしましょう」

懐紙の十万を手に取り、これを自分の財布へ入れた。

「日取りが決まり次第、三番筋へお越しください」

「わかりました」

おせいは、一足先に角松を出ていった。
紫は、ゆっくりともつ鍋を食すと、その足で人里離れた古い掘立小屋に向かった。
そこには、二人の男が紫の到着を待っていた。
この二人は、かつて何度か梅安と〝仕事〟を共に行った仕置人で、ひとりは飾り職の秀、もうひとりは、中村主水といった。
「なんでぇ、藪から棒に呼び出しやがって」
「あら、つれませんわね」
「用があるんならさっさと話してくれないか？こっちも簪の仕事があるんだ」
「はいはい……」
紫は懐から一万円の十枚束を二つを取り出すと、それを懐紙の上に並べた。
「仕事料は、一人頭十万……最も、今回に関しては〝脇役〟ですがね」
「〝脇役〟？本命は誰がやるんでぇ？」
「仕掛人よ」
「仕掛人が……？」
「実はね……」

※賢者説明中

「なるほどな……そういうわけがあるのかい」
「だから、貴方たちには取り巻きを始末してほしいの。仕掛人がやりやすくできるように、ね」
「だけど紫さん。取り巻きの始末だけでも四人は必要だ。後の二人は

どうするんだ？」
「その点は心配なく。ちゃんと対策は打ってるわ……さて、ここまで聞いた以上、断るつもりじゃあ、ありませんよね？」
《推奨ＢＧＭ：からくり人のテーマ（必殺からくり人より）》
紫の言葉に、ふたりは全く動じない。むしろ、その目には血が滾っていた。
ふたりは無言で置かれた札束を懐にしまい、小屋を出た。
紫は懐紙をしまうと、小屋を出た……

＊

それから、数日後のこと……
第７鎮守府敷地内にある長谷川源蔵の役宅を、浜風が訪ねてきた。
なんでも、先だっての久次郎殺しの一件で、是非とも源蔵の耳に入れておきたいことがあるそうな……
源蔵はすぐさま浜風を応接室へ通した。
「何か、久次郎の一件でわかったことがあるのか？」
「はい。最初は、第１３鎮守府の輝提督のお耳にも入れておこうかと思いましたが、どうも近頃、誰かに尾けられているようで……」
「ふむ……」
この時、源蔵は浜風には内密に、彼女を護るために配下の密偵たちを使って密かに護衛をさせていたのだ。
それに気付くあたり、流石は海軍警務隊の艦娘といえよう。
「……それで、俺に話とは？」
「はい。実は昨日、品川二丁目の小料理屋〔吉田屋〕の奥さんが私の家へ訪ねてきまして……」
その奥さんの名は幸子といい、二十五、六くらいの若い女房が、今朝方、浜風の自宅を訪ねてきたのだ。
「こちらの隊員の森山さんが、急に、お亡くなりになったと、ニュース

で見まして……」
「はい」
「もしや…あの…ご病気でお亡くなりになったわけではないのでは……」
「っ!?」
一瞬、浜風は黙ったが、こうなれば肚を据えて、と、思い直し、
「よく、ご存知で」
と、いった。
「やはり……」
いったなり、幸子は顔を俯かせた。
ギュッと握りしめた拳に、涙が滴り落ちた。
「いったい、どういうことなのです?」
源蔵は落ち着いて、物静かに聞いた。
「うちの人は…黙ってじっとしていろと申しますが……森山さまが亡くなったと聞いて、どうにも…どうにも我慢がならなくて……すべて、すべて申し上げます!」
幸子の目から、涙が溢れてきた。

＊

その夜……
輝梅安は源蔵から呼び出され、矢矧と共に〔五鉄〕の二階奥座敷で源蔵と共に軍鶏鍋を食べていた。
もっとも、ただ食べているわけではない。昼間浜風から聞かされたことを二人に伝えるためである。
「えっ?金貸しが阿藤親子に殺された?」
「そうだ。その小料理屋の女房の父が、消費者金融を生業にしている〔小村万七〕といってな。その万七が、阿藤銀次の嫡男、阿藤健之助に二百万貸したそうだ」

「軍令部次長の倅が金貸しから金を、ですか？」
「そう、そこだ。万七も、最初は妙に思っていたのだが……」
源蔵はそのまま、事の経緯を話しだした……

この時、橋渡し役をしたのが、黒部十蔵という憲兵であった。
黒部は以前にも万七から金を借りたことがあり、その金は元利ともに返済していた。
ゆえに、万七は黒部を信用していた。
黒部は、万七を第７７７番鎮守府へつれて行き、そこで健之助に会わせた。
「どうしても、閣下が入用ゆえ、二百万ほど貸してもらいたい。これは、三ヶ月以内には必ず返済できる金だ」
と、黒部十蔵がいった。
「……よろしゅうございます」
万七は熟考の末、健之助直筆の証文と印鑑を要求し、承知した。
……が、健之助は金を返さなかった。
一年もの間一文の利息を払わず元金も返さぬ健之助を、万七はたまりかねて裁判所に訴え出た。
しかし、この裁判において…
「些かも存ぜぬこと」
と、健之助が薄ら笑いを浮かべていえば、黒部が
「私は以前にも小村様から金をお借りしましたが、それはすべて返済しておりますしな……」
平然といった。
「しかし、ここに被告直筆の証文がありますが…」
原告側の弁護人が証文を見せつけて反論するが、
「おぼえがないなぁ。恐れ多くも海軍軍令部次長を務める阿藤銀次の嫡男たる私が、金貸し風情から金を借りるなどありえませんからなぁ」
と、平然と突っぱねた。

不思議なことに、
「…そうですか…」
と、弁護人も、それ以上の追及はしなかった。
そして突然、判決の日に、裁判所に出頭した万七を待っていたかのように公安が、
「反政府団体への資金援助」
という身に覚えのない容疑で拘束され、そのまま銃殺された。
これを聞いた幸子は、泣くに泣けず、あきらめるにもあきらめきれず、警務隊員の久次郎へ内密に相談した。
聞いて久次郎は、言下に、
「そいつぁ、おかしい……!」
と、いった。

「捨て置けなくなった久次郎は阿藤健之助を探りにかかり、それに気付いた阿藤銀次によって消された……そういうところだな」
源蔵が語り終えると、矢矧がイラついた表情で
「そこまでわかっていながら、なぜ阿藤親子を召し捕らないのです」
と、いった。
「それができりゃあこんな苦労はしねえよ」
「軍令部が、なにか言ってきたんで?」
「うむ。恐らく阿藤銀次めが手を回したのだろう。警務隊にこの事件から手を引くよう命じてきた。俺としちゃあ、これを無視して海軍を揺るがす大捕物にしてえところだが……」
「下手をすれば海軍の統帥権問題、ひいては永田町の政治屋どもに弱みを握られることになる……」
「その通りだ……ゆえに、お前ら二人に頼みたいことがある」
《推奨ＢＧＭ：必殺仕掛人・メインテーマ（劇場版必殺仕掛人より）》
その言葉に、梅安と矢矧の目が鋭く光った。
「表の法で裁けぬのなら、裏の法で裁くべし……ふふ、俺が何も知らずにお前さんらにこのことを話すとでも思ったのか?」

ニヤリを笑みを浮かべながら、源蔵は懐から札束を二つ取り出し、懐紙の上に置いた。
「こいつぁ、阿藤銀次が俺に口止め料として送ってきた賄賂の一部だ。ふふ、賄賂の使い道にしちゃあ、粋なもんだろう？」
源蔵は笑みを浮かべていうが、この金はすなわち、
「俺の代わりに阿藤親子を仕掛けてくれ」
という、意思表示であった。
梅安と矢矧はその札束を手に取って懐にしまうと

「……で、だれを殺ればいいんで？」
と、いった……

＊

その帰り……
梅安と矢矧は鎮守府に帰ると、梅安の自室で今度の仕掛について話し合っていた。
「弱りましたね」
「まったくだ。だが、ご両所の言う通り、あの親子は生かしておいては世のため人のためにならん奴だってことは、間違いない」
「ですが、簡単ではありません。恐らく提督を襲った連中や、大勢の部下や憲兵をいつも護衛につけているでしょうね」
「ん……」
「それに父親の方も仕掛けるのでしょう？軍令部次長という、超大物

を……」
「……ああ」
「大丈夫ですか？一人でも厄介なのに、親子両方なんて…」
「だからこそ、俺は親父の方を、お前には倅の方をやってほしいのさ」
　梅安は砥石を水で濡らせると、殺し針を研ぎ始めた。
「それに親父の方は、音羽の元締が段取りをつけてくれるそうだ」
「元締が？」
「ああ、詳しいことは聞かなかったが……とにかく、倅の健之助の方を、先に仕掛けてほしいとのことだ」
「倅の方を、ですか……」
「倅の方は、取り巻きを仕置人がどうにかしてくれるらしいから、やりやすくなるはずだぜ」
「仕置人との合同ですか……」
「不満か？」
「いえ……」
　矢矧はそういうと、部屋を出た……

＊

　それから矢矧は、日進を使って健之助が出入りしているという賭場を突き止めると、酒を使って健之助のことを探り続け、明晩、清和会の賭場で護衛の憲兵や部下達と博奕を打ったあと、いつものように吉原にある〔玉の尾〕という高級ソープへ出かけると聞きだした。
（吉原の〔玉の尾〕といえば、値は高いですが品の良い泡嬢を買えるという噂のソープですね……だから相応の金が必要で、金貸しから金を借りた挙句に踏み倒すというのですか……ちっ）
　そして翌日、矢矧は八雲藍の案内で、第１３鎮守府近くの洞窟に来ていた。
　ここで、仕置人と合流する手筈となっている。

矢矧が洞窟の中に入ると、そこにはすでに主水と秀が待ち構えていた。
「まさかまたおめぇらと手を組むことになるとはな…」
「お二人だけですか？話では４人と聞いていましたが？」
「もうすぐ来る筈だぜ。といっても、俺らも顔を合わせるのは始めてだが」
「信用に値する人物でしょうか？」
「さぁな」
そんなやりとりをしていると、スキマと共に三人の人物が現れた。
ひとりは、仕置人の元締である八雲紫である。
それに続いて現れた二人の人物を見て、主水と秀の顔色が変わった。
その二人は、主水と秀に馴染みのある人物だったからだ。
「おめぇは……おせいじゃねえか!?」
「驚きましたね……まさかまた貴方と手を組むことになろうとは」
「〔半兵衛〕さん!?どうしてここに!?」
「よう、久し振りだな秀」
おせいに関しては、以前にも説明したがもう一人の人物〔知らぬ顔の半兵衛〕について説明せねばなるまい。
この知らぬ顔の半兵衛。かつてはおせいが江戸で〔仕事屋〕という稼業の元締だった頃の配下で、ある事件で江戸を追われる身となるが、その過程で江戸を去ったばかりの秀と組み、裏の仕事をしていた時期があった（詳しくは「必殺必中仕事屋稼業」の最終話と「必殺シリーズ１０周年記念スペシャル　仕事人第集合」を参照）仲であった。
「なるほど……そのような仲だったとは」
「ま、これも何かの縁ってことだな……さて、あんたが件の仕掛人かい？」
「……」
半兵衛とおせいは、長ドスに手をかけている矢矧に目を向けた。
「心配なさらなくても結構ですよ。事情は紫さんからよく聞いております」

「お前さんが本命を、俺らが取り巻きを殺る。ちゃんと仕事料は貰ってるぜ」
「もし仕損じたら……貴方たちの命はありませんよ」
それだけいうと、矢矧は手をおろした。
「では……頼みますよ」
《推奨ＢＧＭ：商売人出陣（江戸プロフェッショナル・必殺商売人より）》
紫の声と同時に、五人は洞窟を出ていった。
残された紫と藍は、蝋燭の火を消すと、スキマで何処かへと姿を消した。

人気のない夜道を疾走する秀と半兵衛……
紫の頭巾を被り、一人夜道を行くおせい……
襟巻を巻き夜道を歩く主水……
人混みを避けるように歩く矢矧……

仕掛は、今夜―

＊

赤坂某所にある料亭……
ここの離れの座敷で、阿藤健之助が黒部十蔵とその部下数人と酒を呑み交わしていた。

この数刻前に、健之助は父・阿藤銀次から重要な知らせがあるので、この料亭にくるよう呼び出された。
そのため、健之助はいつものように黒部ら取り巻き達を引き連れてこの料亭に来たのである。
「しかし次長閣下から直々のお呼び出しとは、いよいよ閣下の将来も明るくなりますな」
「まったくだ。父上とて俺をいつまでも一地方鎮守府の提督で留めるほど馬鹿ではない。これが吉報であれば、お前たちの未来も明るいぞ」
「それはもう」
健之助と黒部は談笑しながら、酒を呑んだ。
「……しかし、父上も遅いな。流石にこの酒も飽きてきたぞ」
「まったくですな。はっはっはっ！」
と……
♪～
「む……」
突然、座敷の外から笹笛の音が聞こえた。
黒部が部下を使って彰子を開けて庭を見た。
《推奨ＢＧＭ・闇の裁き（江戸プロフェッショナル・必殺商売人より）》
庭の中央に、黒装束に同田貫を携えた矢矧が立っていた。
「貴様、何者だ？」
黒部が問うと、矢矧は口に咥えていた笹を捨て
「仕掛人、軽巡矢矧……阿藤健之助、貴方の命を貰い受ける」
と、名乗りを上げて、腰の同田貫を抜いた。
「仕掛人だと……ふっ、艦娘風情が……やれい！」
黒部の命令と同時に部下二人が矢矧に襲いかかるが、矢矧はそれを苦も無く返り討ちにした。
「おのれぇ！者ども斬れ！斬って捨てい！」
健之助は黒部と残った部下一人に守られながら奥座敷へ逃げた。
矢矧は襲い掛かる部下を斬り捨てながらその後を追った。
同じ頃、異変に気付いた健之助の取り巻き達が健之助の許へ向かっ

ていた。
しかし、その行く手を刀を持った主水と朱塗りの匕首を持ったおせいが待ち受けていた。
主水とおせいは向かってくる取り巻き達を次々と斬り伏せていった。
「おのれぇ！」
最後の取り巻きが主水に銃を向けるが、おせいが仕込み扇子を投げてそれを阻止した。
「ぐわっ！」
取り巻きは軍刀を取ろうとするが、主水はその取り巻きに最後の一太刀を喰らわせた。
「ぎゃっ！」
最後の取り巻きを斬り伏せると、主水は刃についた血を振り払って鞘に納め、おせいも仕込み扇子と匕首をしまった……

＊

矢矧から逃れるべく、黒部十蔵とその部下に守られながらさらに奥の座敷へ逃げた阿藤健之助だが、三人に待っているのは〝死〟以外の何者でもなかった。
《推奨ＢＧＭ：仕事屋大勝負（必殺必中仕事屋稼業より）》
「なっ!?」
その座敷には、得物を口に挟んだ秀と半兵衛が待ち構えていた。
「こなくそぉ！」
黒部とその部下が二人に斬りかかるが、二人はそれを軽く受け流すと半兵衛は黒部の、秀は部下の背後についた。
半兵衛は口に挟んだ剃刀を黒部の首筋にあてがうと、あてがった部分を手拭いで隠し、そのまま黒部の首筋を斬り裂いた。
それと同時に、秀は部下の延髄に房付きの銀簪を深々と刺し込ん

だ。
黒部とその部下が音を立てて崩れ落ちると、秀と半兵衛はゆっくりと健之助に歩き寄った。
「ひ、ひぃ！」
半兵衛の左手から滴り落ちる血を見た健之助は命の危険を感じその場から逃げようとするが……
「っ!?」
矢矧が彰子越しに健之助の背中を刺し貫いたのである。
同田貫の刀身は健之助の躰を貫き、刃が胸から飛び出していた。
矢矧が刃を引き抜くと、健之助はそのまま崩れ落ちた。
矢矧は血を振り払って鞘に納めて、ゆっくりとその場を去った。
秀と半兵衛も、健之助の死を確認してから、座敷を後にした……

＊

それから五日後……
山本半右衛門と八雲紫が、後金を携えて第１３鎮守府を訪れた。
「矢矧さん。仕置人の助けがあったとはいえ、毎度のことながら見事なお手並、恐れ入りました」
と、半右衛門が世辞でもなんでもなく、矢矧にいった。
「ほぉ、ご両所は私の仕掛を見ていなさったので？」
「まさか。知らせてくれる方がおりましてね。後で耳に入りました次第です」
「なるほど……」
紫と半右衛門は、今度の仕掛をおこなうにあたって、阿藤銀次の部下か、もしくは阿藤家の内情に通じている者から、いろいろと情報を得ているに違いない。
「とりあえず、この半金をお受け取り下さい」
と、紫がアタッシュケースにつめられた一千万円を差し出した。

梅安はそれを矢矧に渡すと、矢矧はそれを自身の手元に置いた。
そして、梅安は思い出したように、
「……耳に入るといえば元締、どうにも気がかりなことがございましてねぇ」
と、いった。
その言葉に、紫と半右衛門は興味を示した。
「ほう……伺いましょう」
「あれから今日まで、矢矧には自室に籠らせていたんですが、何故阿藤健之助の死が、うわさでも耳に入らないんで？」
半右衛門と紫の耳が、ピクリと動いた。
「小村万七の一件が公にならないよう有無を言わさず万七を殺して健之助を守った阿藤銀次が、何故実子たる健之助が殺されたことを当局に知らせずホシを上げようとしないのか……実に妙ですねぇ……」
「……」
半右衛門は黙ったが、紫は間をおいて、
「……我が子よりも地位……軍令部も、腐りきってるのよ……」
と、自嘲気味にいった。
その言葉には、世の中への怒りがこもっていた。
「ところで……」
すると、半右衛門が思い出したように、
「明後日の夜に、王子にある料亭〔大村〕へ阿藤銀次がまいります」
と、いったものである。
〔大村〕は、北区・王子にある料亭で、１００坪の土地に離れの座敷が六つあり、政治家や有名人がおしのびでよく来ている店である。
その大村へ、明後日の夜、阿藤銀次がおしのびであらわれるというのだ。
銀次を大村へ招待するのは、東部憲兵隊横須賀地区憲兵隊隊長の川合佐兵衛だ、と、山本半右衛門はいった。
これには、流石の梅安も仰天した。
「倅が死んで十日も経たぬ内に料亭へ、ですか？」

「左様です。こいつぁ……

きっと、仕掛けてくださいまし」

＊

そして、翌々日……

北区・王子の料亭〔大村〕の奥座敷に、ふたりの人物が密談をしていた。

ひとりは、海軍軍令部次長・阿藤銀次。

もうひとりは、東部憲兵隊横須賀地区憲兵隊隊長の川合佐兵衛であった。

「閣下。まことにもって、このたびは……お悔やみの申しようがございませぬ」

〝このたび〟とは、健之助のことを指したものであろうが、言葉とは裏腹に、佐兵衛の顔には薄笑いがうかんでいた。

「うむ……うむ……」

ゆったりとした佇まいで座る阿藤銀次もまた、健之助が死んで間もないというのに、これまた上機嫌であった。

「ご苦労であったな、川合。いずこの者に頼んだのだ？」

「それは、申し上げかねまする」

「まぁよい。健之助にこれ以上生きてもらっては私も危うくなる。当局やマスコミに大金をまき散々あやつの悪事をもみ消してきたが…金貸しが証文というぬきさしならぬ証拠を持って訴え出たときはさ

すがに肝を冷やしたわ。これが公になれば、あの松平が黙ってはおるまい。健之助が裁かれるだけでなく、私にもかかわることよ。毒を盛ってくれようかと考えたが、身内のことだ。万一事が洩れればそれこそ取り返しがつかなくなる。故に、貴様に頼んだのだ……ほっとした。これで万事解決だ」
「もう、それほどになさいませ」
「望みがあるなら、何でも申せ」
「それにつきましては、いずれ、あらためて申します……ささ、今夜はゆるりとおくつろぎください」
佐兵衛が手を叩くと、女中たちが膳と酒を運びいれると同時に、芸者たちが座敷に入っていった。
それから、しばらく後……
「あぁ～…気分がいいのお～」
阿藤銀次は、若い芸者につきそわれ、手洗場（便所）にむかっていた。
「健之助めぇ…我が子ながら狂っておった！誰の血を引いたのかのぉ～」
健之助の愚痴をつきながら廊下を歩き、戸口の近くまでくると、つきそいの芸者を抱きしめ、荒々しくその唇を吸った。
「ははは！ちゃんとそこで待っておれよ！」
銀次は芸者を解放すると、上機嫌で手洗場に入った。
不用心にも、このとき阿藤銀次は、手洗場の照明をつけ忘れていた。
それ故に、手洗場の闇に潜む存在に気付けなかった。
《推奨ＢＧＭ：必殺！》
「ふう～」
戸を閉め、おぼつかない足取りで便座へと歩く銀次の背後を取った梅安は、その延髄に向けて深々と殺し針を刺し入れた。
「!?!?!」
阿藤銀次は声をあげる間もなく、そのまま崩れ落ちた。
「もし……もし、軍人さま……」
中の異様な物音に気付いた芸者が、戸の外から声をかけた。

梅安は戸の内側に立ち、落ちついていた。
恐怖に襲われた芸者は、戸を開ける勇気もなく、悲鳴をあげて駆け去った。
梅安はそれを見すまして、戸の外へすべり出ると、たちまち塀を飛び越えて、大村を後にした……

＊

この数日後、海軍省広報課は阿藤銀次と健之助の父子（おやこ）の病死を発表した。
そして、これと時同じくして、横須賀地区憲兵隊隊長・川合佐兵衛が自宅で割腹自殺した状態で発見されたという……

＊

それから、一週間後のこと……
その日は、都内でもまれにみる大雪であった。
輝梅安と矢矧は、鎮守府で湯豆腐を食べながら、今回の一件を振り返っていた。
「それにしても驚きましたね。健之助を殺させたのが、親父の銀次だったとは…」
「まったくだ。頼まれた川合は無論そのことを元締に隠していたんだろうが、元締のことだから、わけもなく探り出したんだろうよ」

「ふむ……で、銀次を殺させた奴は、いうまでもなく、元締でしょうね」
「だろうな。仕掛のことであの父子を探っているうちに、自分が親父の方を仕掛けたくなったのだろうよ」
「なるほど……では、何故仕置人と手を組むことになったんでしょう？」
「早い話、ダブルブッキングという奴さ。八雲の元締は別口で阿藤父子の仕掛を頼まれて、それで探っているうちに音羽の元締がこの件で動いているのを知った。そこで元締に花を持たせてやろうと思ったのだろうよ。でなければ源内先生のボディガードや健之助の仕掛の段取りや手伝いをやってくれるわけがねえ……やはり、あのご両所にかかれば、この程度のことなど造作もないことなんだろうよ」
「みたいですね」
「矢矧」
「はい？」
「雪が、熄んだようだよ」

＊

仕置（しおき）
法によって処刑することを、江戸時代こう呼んだ。
しかし、ここにいう仕置人とは、法の網を潜ってのさばる悪を裁く、闇の処刑人のことである。
ただし、その存在を証明する記録、古文書の類は一切、残っていない……

（必殺仕置人より）

＊

原作：池波正太郎「仕掛人・藤枝梅安『闇の大川橋』」

艦これ仕掛人スペシャル「ひとでなし消します」

終劇